

# クロスロード

6



特集

再赴任ドキュメント

派遣国の横顔 ～トンガ～



現在の派遣国数

28カ国



# JICA海外協力隊 派遣現況

(2021年4月末現在、単位：人)

## ■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	4	
ガーナ	7	
ガボン	2	
ケニア	8	
ザンビア	3	1
ジンバブエ	5	
セネガル	2	
タンザニア	3	
ナミビア	1	
マダガスカル	2	
南アフリカ共和国	1	
ルワンダ	8	

## ■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	5	
ウズベキスタン	2	
カンボジア	4	
キルギス	2	
中華人民共和国	3	
ブータン	1	
ベトナム	2	
マレーシア		2
ラオス	12	2

## ■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
トンガ	1	
バヌアツ	1	

## ■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	1	

## ■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	2	

## ■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	7			3
パラグアイ	1			
ポリビア	1			

## ■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	91 (51/40)	5 (4/1)	3 (2/1)	0	99 (57/42)
累計 (男性/女性)	45,792 (24,315/21,477)	6,555 (5,300/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,436 (30,464/23,972)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

# クロスロード

2021 JUN.

## Contents

■職種別索引	掲載ページ
観光	10
環境教育	30
陸上競技	32
PCインストラクター	24
珠算	6、36
日本語教育	8
体育	12
小学校教育	18
料理	36
看護師	14
作業療法士	26
理学療法士	26
病院運営管理	20
障害児・者支援	16
高齢者介護	21

■国別索引	掲載ページ
カンボジア	12
コスタリカ	4
ザンビア	20、24
セルビア	16
タイ	10、21
トンガ	6、8、36
パラオ	18
パラグアイ	32
ベトナム	14
モザンビーク	30
モンゴル	36

■出身都道府県別索引	掲載ページ
宮城県	18
群馬県	4、32
東京都	12、30
長野県	10、28
大阪府	8
兵庫県	21
愛媛県	14
熊本県	20
大分県	24
宮崎県	6
沖縄県	16

### 【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

#### 国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2021年度1次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株) AND

レイアウト：(株) AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

## JICA Volunteers' Reports

- ▶「協力隊活動×SDGs」をテーマにしたオンラインのトークイベントを開催（日本）
- ▶協力隊経験者が担当するホストタウン事業が内閣官房の特別賞を受賞（日本）

## 派遣国の横顔 ～トンガ～

6

### 人的資源

興津絵美さん（珠算・2016年度1次隊）

8

### 人的資源

中川歩美さん（日本語教育・2017年度3次隊）

### 特集

## 再赴任ドキュメント

10

### タイ／観光

小林美紀さん（2018年度3次隊）

12

### カンボジア／体育

西原大二郎さん（2018年度3次隊）

14

### ベトナム／看護師

大森美和さん（2018年度4次隊）

16

### セルビア／障害児・者支援

宮城勇也さん（2018年度3次隊）

18

### “失敗”から学ぶ

川道明子さん（旧姓：桑原／パラオ・小学校教育・2018年度1次隊）

20

### 希少職種図鑑

▶病院運営管理 原 隆さん（シニア海外協力隊員／ザンビア・2017年度4次隊）

▶高齢者介護 大室知世さん（タイ・2017年度3次隊）

22

### JICA海外協力隊的プチテクガイド

ポッチャ入門／電子書籍のセルフ出版

24

### JICA Volunteers' Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

通信制高校のサポート校のチューター 蔵本有紀さん（ザンビア・PCインストラクター・2016年度4次隊）

26

### 帰国後よもやま話

リハビリ分野隊員篇

28

### Pick Up OB・OG会

▶青年海外協力隊長野県OB会

▶NPO法人シニアボランティア経験を活かす会

30

### 先輩隊員のシューカツ記

白井グループ株式会社 社員 佐野卓也さん（モザンビーク・環境教育・2016年度3次隊）

32

### JOCV SPORTS NEWS

34

### JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「誕生日」

35

### INFORMATION

36

### 隊員めし

モンゴル風ポテトサラダ「ニスレレ・サラット」





群馬県在住の協力隊経験者を紹介するパンフレット(右のQRコード)の完成を記念して行われたトークイベントの様相

トークイベントの開催概要	
日程	[第1回] 2021年4月11日(日) [第2回] 2021年4月18日(日)
方法	ウェブ会議
登壇者	[第1回] ●馬場正さん(フィジー・土木・2016年度3次隊) ●清水香奈さん(フィリピン・障害児・者支援・2016年度1次隊) [第2回] ●中島宏典さん(パラグアイ・陸上競技・2015年度4次隊) ●高野綾子さん(セネガル・看護師・2016年度2次隊)



Japan

## 「協力隊活動×SDGs」をテーマにしたオンラインのトークイベントを開催

文=宮田峻弥(ガーナ・小学校教育・2018年度1次隊/JICA群馬デスク 国際協力推進員)

JICA群馬デスクでは、群馬県在住の協力隊経験者を紹介するパンフレット『JICA海外協力隊とSDGs』を群馬から持続可能な世界をめざそう!』を2021年4月に発刊しました。派遣中や帰国後の活動、およびそれらとSDGsのつながりを広く知ってもらうためのものです。その完成を記念して、パンフレットに登場した協力隊経験者のうちの4人に「ご登壇いただくオンラインのトークイベントを、4月11日と18日に開催しました。当日は、国際協力に興味を持つ高校生や大学生、NPOの方々や協力隊経験者など、延べ約60人の方にご聴講いただきました。イベントはパンフレットと同様、「協力隊活動×SDGs」をテーマに設定しました。登壇者の4人は派遣国も活動分野も異なる方々です。そこでイベントでは、パンフレットで紹介している派遣中や帰国後の活動の詳細を発表していただくだけでなく、派遣国のSDGsに関する事情や、それぞれの活動分野とSDGsのかかわりなど、パンフレットで触れることができなかった話題についても議論していただきます。



第1回トークイベントのチラシ

例えば、障害児・者支援隊員の清水さんは、派遣国のフィリピンの障害者福祉について、地域の人々による障害者のサポートが日本よりも活発であるという実態を紹介。その根底にある「幸せを分かち合う」というフィリピンの人々の精神が、持続可能な社会をつくるうえで必要だとの考えを述べられました。看護師隊員の高野さんは、派遣国のセネガルの医療事情について、日本なら助かる命が医療事情により助からないことがあり、現地の人たちが信仰によってそれを受け入れているという実態を紹介。それを目の当たりにした経験から「命の見方が広がり、帰国後は「緩和ケア」など体と心のつながりを重視する医療の仕事に携わっていることをお話しされました。

聴講者に提出していただいた事後のアンケートでは、「自分の将来について幅広く考えるきっかけになった」「現地での活動を実際に体験した人から話を聞くことができたのは貴重だった」といった感想が寄せられたことから、パンフレットを補完する有意義なイベントになったのではないかと思います。

今回のイベントがきっかけとなり、JICA群馬デスクには国際協力の学生サークルなどから協力依頼が舞い込むようになりました。そうして生まれた県民とのつながりを1つ1つ大切に生かしながら、今後群馬県の国際協力を盛り上げていくための力になれるよう、努めていきたいと考えています。

今回のイベントがきっかけとなり、JICA群馬デスクには国際協力の学生サークルなどから協力依頼が舞い込むようになりました。そうして生まれた県民とのつながりを1つ1つ大切に生かしながら、今後群馬県の国際協力を盛り上げていくための力になれるよう、努めていきたいと考えています。

松川町のホストタウン事業のプログラム例	
文化交流	●コスタリカ祭り ●コスタリカ・スタディツアー ●コスタリカ料理教室 ●コスタリカ映画の上映会 ●音楽祭へのコスタリカ人ピアニストの招待 ●オンラインのマリンバコンサート
スポーツ交流	●コスタリカの選手が出場する柔道やサッカーの国際大会での応援観戦や選手との交流
その他	●駐日コスタリカ大使との交流会
ウェブサイト	



町民有志で企画した「コスタリカ祭り」では、コスタリカ人のダンサー一家を招いて参加者らと交流した(2019年)

Japan

## 協力隊経験者が担当するホストタウン事業が内閣官房の特別賞を受賞

文=白井瑞穂さん(コスタリカ・日本語教育・2014年度3次隊/松川町教育委員会生涯学習課 ホストタウン推進員)

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、東京2020)でコスタリカのホストタウンとなっている長野県下伊那郡松川町は、今年2月、内閣官房が主催する「ホストタウンサミット2021」で「オンライン交流賞 特別賞」を受賞しました。この賞は、コロナ禍なかで創意工夫を凝らしたオンラインによるホストタウン事業を行った自治体表彰するものです。松川町が、JICA研修員の受け入れなどで以前から関係があったコスタリカのホストタウンとなったのは16年。私はコスタリカでの協力隊活動を終了後の17年に、ホストタウン事業の担当者として松川町に着任しました。19年のホストタウンサミットでは、事業の推進に貢献した担当者に贈られる「ホストタウンリーダー賞」を頂いており、松川町の事業は今回が2度目の受賞となりました。

着任した当時、町内でコスタリカを知る人はわずかでした。そこで、まずはどのような国なのかを知ってもらおうと、町民有志による「コスタリカくらぶ」を立ち上げ、コスタリカ映画の上映会、コスタリカの方を招いた講演会などから事業を始めました。19年に実現した「コスタリカ祭り」では、コスタリカのダンサーを招いたステージ、コスタリカの民族衣装や食が体験できるブースの出展など多彩なプログラムを企画し、約300人へのほる方々にご来場いただくことができました。応援機運の高まりを実感することができた思い出深いイベントとなっています。

松川町ではコスタリカの選手の事前宿泊の予定がなかったことから、ホストタウン事業においては人や文化の交流に重点を置き、「町が世界とつながるきっかけ」となる機会をなるべく多く創出すること意識してきました。ところがコロナ禍に入ると、コスタリカへのスタディツアーやコスタリカ人との交流イベントなど、それまで大切にしてきた「対面の交流」が難しくなっていました。そこで、オンラインでできる交流の可能性を模索するようになり、コスタリカの伝統楽器マリンバのオンラインコンサート、コスタリカからリアルタイムで映像を送ってもらうオンラインツアーなどに挑戦。町民の方々に予想以上に楽しんでいただけるプログラムであることがわかりました。

プログラムの企画や実施では、協力隊経験によってつながることができた方々——協力隊員、JICAや日本大使館の関係者、コスタリカ人の友人など——から、コスタリカ人の紹介などさまざまな形でお力をお借りしてきました。

これまでの事業をステップとして、東京2020の後も町民とコスタリカの方々が相互に学び合う継続的な交流の仕組みをどうつくるかというのが、現在の課題です。また、昨年は事業の一環として町で暮らす外国人の方々を対象とする日本語教室も開講しました。東京2020という機会を生かして町の国際化のためにできることは何か、知恵を絞って残された時間を有意義に使いたいと考えています。

松川町ではコスタリカの選手の事前宿泊の予定がなかったことから、ホストタウン事業においては人や文化の交流に重点を置き、「町が世界とつながるきっかけ」となる機会をなるべく多く創出すること意識してきました。ところがコロナ禍に入ると、コスタリカへのスタディツアーやコスタリカ人との交流イベントなど、それまで大切にしてきた「対面の交流」が難しくなっていました。そこで、オンラインでできる交流の可能性を模索するようになり、コスタリカの伝統楽器マリンバのオンラインコンサート、コスタリカからリアルタイムで映像を送ってもらうオンラインツアーなどに挑戦。町民の方々に予想以上に楽しんでいただけるプログラムであることがわかりました。

松川町ではコスタリカの選手の事前宿泊の予定がなかったことから、ホストタウン事業においては人や文化の交流に重点を置き、「町が世界とつながるきっかけ」となる機会をなるべく多く創出すること意識してきました。ところがコロナ禍に入ると、コスタリカへのスタディツアーやコスタリカ人との交流イベントなど、それまで大切にしてきた「対面の交流」が難しくなっていました。そこで、オンラインでできる交流の可能性を模索するようになり、コスタリカの伝統楽器マリンバのオンラインコンサート、コスタリカからリアルタイムで映像を送ってもらうオンラインツアーなどに挑戦。町民の方々に予想以上に楽しんでいただけるプログラムであることがわかりました。



# 派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。



## Field 1

### 人的資源



おきつ えみ  
興津絵美さん  
(珠算・2016年度1次隊)

#### PROFILE

1983年生まれ、宮崎県出身。小・中学生のときに珠算を習い、2段を取得。大学卒業後、焼酎メーカー勤務を経て、2016年7月に青年海外協力隊員としてトンガに赴任。18年7月に帰国。

#### 活動概要

- トンガ教育訓練省学習指導課に配属され、主に以下の活動に従事。
- トンガタプ島東地区にある小学校22校での珠算指導の質向上支援
- 小学校教員を対象とする珠算指導のワークショップの開催
- 珠算大会の運営支援

## 「小学校を巡回して 現地教員による珠算指導の 質向上を支援

教育行政機関に珠算隊員として配属された興津さん。担当地区にある小学校22校を巡回して、3〜5年生の算数授業に組み込まれている珠算指導の質向上支援に取り組んだ。

興津さんが配属されたのは、国の教育行政を担うトンガ教育訓練省の学習指導課。回国では、小学校（6年制）の3〜5年生の算数授業で毎回、全90分間のうち最初の15分間を珠算指導に充てることが必須とされている。興津さんに求められていたのは、首都ヌクアロファがある本島・トンガタプ島の小学校で、珠算指導の質向上に向けた支援を行うことだった。同じ時期、学習指導課にはほかに2人の珠算隊員が派遣されており、トンガタプ島にある3地区を1つずつ分担。興津さんは、小学校が22校ある東地区の担当となった。

隊員が初めて派遣されたのは1989年。珠算が算数授業の必修単元になったのは2009年だが、それ以前も、協力隊を含む日本の支援を受けながら珠算指導を行う小学校はあった。しかしその範囲は限定的で、現在の小学校教員の多くは小学生のときに珠算を学ぶ機会がなかった人たちだ。トンガの小学校はクラス担任制がとられており、珠算指導の技術を持つことはすべての教員にとって不可欠。そのため現在は、同国唯一の教員養成校の初等教育課程に珠算やその指導法を学ぶ授業が組み込まれており、7級の取得が卒業の条件となっている。

珠算指導の内容については、教育訓練省がカリキュラムを作成。3〜5年生の各学年で何をどういう順番で教えていくかが定められており、それに対応した指導書もある。また、授業で児童に使わせるそろばんや、講義形式で児童たちに指使いの説明をするための大きなそろばんの模型が、各校に配布されていた。

### 「支援し過ぎない」を徹底

トンガタプ島東地区の小学校で協力隊員が珠算指導の支援を行うのは、実質的に興津さんが初めてだった。そうしたなか、興津さんの巡回先で着任時に見られた問題は、そもそも珠算指導をしない教員が多い学校があったことだった。

興津さんは、前年の学期末のテストで珠算の平均点が低かった4校から巡回を開始。すると、いずれも珠算指導を疎かにしてきたこ

とが明らかで教員が多くいた。珠算指導の支援をしないと伝えても、「それならば、代わりにやってほしい」と求められる。それに対して興津さんは、手本を見せるためであれ、自ら教壇に立つことはしないようにした。一度それを引き受けてしまうと、その後依存され続けようとしてしまうからだ。協力隊員が派遣されたことがない離島の学校で、教員たちが協力し合い、珠算指導のレベルの底上げを実現している例があるという話を聞いていたことも、「支援し過ぎない」という意志を貫く支えになっていた。

興津さんが巡回先で最初に行ったのは、「なぜ珠算指導を疎かにしてしまうのか」を尋ねること。すると、「指導書がない」「カリキュラムを知らない」といった答えが返ってきた。興津さんはそうした教員に対し、一度は配られているはずの指導書のコピーやカリキュラムの一覧表を渡すなどして、「やらない理由」

を消していった。すると次第に、興津さんが訪問しなかった日にも珠算指導を進める教員が出てきた。興津さんはそうした教員の珠算指導に立ち会い、珠算に関する知識の誤りを正すなどのフォローを進めていった。

### 算数の学力不足が課題

トンガの小学校では、6年生の最終学期に全国共通の卒業試験があり、その成績が卒業後の進路を左右する。しかし、この試験では珠算が出題対象となっていない。そうした事情で珠算指導を仕方なく行わない教員もいた。5、6年生のクラスを兼務する女性教員（以下、Aさん）だ。6年生のクラス担任は、校長が指導力を認めている教員を配置することが多く、Aさんもその一人だった。一緒に食事をするなどして関係を深めていったところ、6年生の児童が卒業試験で良い成績を取れるよう、私生活の時間を削って補講を行っており、5年生の珠算指導の準備に時間をかける余裕がないことがわかった。しかし、珠算の力も長



① 大きなそろばん模型を使って珠算指導をする、興津さんの巡回先の教員  
② 珠算指導の補助教材として自作した「[10]の分解」の一覧表を手にする現地の教員  
③ 年に1度行われる珠算の本大会に向けた、トンガタプ島東地区の予選大会

## 派遣国の横顔

任地ひとロメロ

### 〈トンガタプ島・東地区〉



店などがすべて閉められて閑散とする、日曜日の町の様子。キリスト教の信仰が厚く、礼拝日とされる日曜日はみな教会のミサで一日を過ごす



右:盛大な食事会「カイポラ」に向け、豚の丸焼きを調理中  
左:「タオルンガ」と呼ばれるトンガの伝統的な踊り





なかがわあゆみ  
中川歩美さん  
(日本語教育・2017年度3次隊)

## PROFILE

1990年生まれ、大阪府出身。大阪大学外国語学部と同大学院言語文化研究科修士課程で日本語教育を学ぶ。大学院時代に日本、ドイツ、タイで日本語教育の実践を経験。大学院修了後の2018年1月、青年海外協力隊員としてトンガに赴任。20年1月に帰国。

## 活動概要

トンガ教員養成学校に配属され、主に以下の活動に従事。  
●日本語専攻の授業の実施  
●日本語専攻のカリキュラムの改訂

## 教員養成校に配属され、日本語専攻の授業運営やカリキュラムの改訂に従事

トンガで唯一の教員養成校に配属され、日本語専攻の授業運営やカリキュラムの改訂に取り組んだ中川さん。心がけたのは、授業やカリキュラムをトンガの日本語教育の状況に合ったものにする事だ。

中川さんが配属されたのは、トンガ唯一の教員養成校。幼児教育・初等教育・中等教育の教職課程がある2年制の学校で、2つの選択科目を専門として履修することになっていた。中川さんに求められていたのは、選択科目である「日本語・日本語教授法」の授業を実施すること。当時、これを担当する現地教員はいなかった。配属先の年度開始は1月で、中川さんの着任は18年2月。18年度と19年度に合わせ4人の学生を指導した。

配属先の学生たちは、卒業後に国内で教員として一定年数働けば返済が免除される奨学金を得て通っている。日本語を専攻する学生の主な進路は、日本の中学校・高等学校にあたる中等学校の日本語専任教員だ。トンガの中等学校は7年制で、3〜7年生のときに「コンピュータ」などと並ぶ選択科目の一つとして日本語を学ぶことができる。

中等学校で選択科目とされている外国語はほかにフランス語と中国語があるが、1986年から同国の中等学校に日本語教育に携わる隊員が派遣されてきたこともあり、中川さんの赴任当時も外国語を選択する生徒の大半は日本語という状況だった。しかし、中等学校で日本語を学んでも、それを生かせる

職を得るチャンスは少ない。そうしたなかでトンガ政府が協力隊などの力を借りながら日本語教育を続けているのは、「人づくり」において外国語教育が持つ意義の大きさに着目していることだ。中等学校の日本語の教科書の前書きには、「外国語を勉強することは、トンガの言葉や文化をより深く知ることにつながる」と書かれている。

中川さんの教え子たちはいずれも、中等学校で日本語を選択して興味を深め、日本語教師の道を選択。4人のうち3人は、中等学校時代に協力隊員から日本語を教わっていた。4人に共通していたのは、臆することなく外国語を使うコミュニケーション能力の高さや、異文化への好奇心の強さだった。

### 「レアリア」の活用を指導

配属先で日本語を専攻する学生は、言わばトンガにおける日本語の「エリート」たち。しかし、日本語を習得する能力が必ずしも高いというわけではなかった。認定レベルが5段階ある日本語能力試験で、卒業生が取得できるのはせいぜい下から2番目の「基本的な日本語を理解することができる」というレベ

生来のエンターテイナーとしての素質と相まって、対象の生徒たちが興味を持つ授業を展開することができた。

### トンガに合ったカリキュラムに

授業を行うことのほかに中川さんの重要な活動となったのは、配属先の日本語専攻のカリキュラムを改訂することだった。配属先は中川さんの着任の前に3年制から2年制へと変更。しかし、中川さんの着任当時は従来のカリキュラムはなく、それを2年制に合わせる必要があった。中川さんは、まずは従来のカリキュラムに沿って授業を進めながら、そこで学生たちの能力や特性を把握し、カリキュラムの内容をどう取捨選択するか検討していった。

中川さんが立てた改訂の方針は、トンガに固有の状況を踏まえた内容にすることだっ

た。従来のカリキュラムはどの国で日本語指導者を育成する場合にも使える内容となっており、トンガでは不要な要素があった。例えば、トンガの中等学校は教室に電気が通っていないのが一般的だが、従来のカリキュラムには、電気が使えることを前提とした視聴覚教材の活用方法などが盛り込まれていた。そうした要素を省いていくことで、全体のボリュームを削減。その一方で、従来のカリキュラムに盛り込まれていない要素で、トンガでは重要だと思われるものは新たに加えることにした。「レアリア」の活用方法もその一つだ。ほかに、「書道道具の管理方法」なども盛り込んだ。トンガの中等学校には教育訓練省から書道道具が配られ、日本語授業のなかでその指導も行われていたからだ。

改訂版は任期の終盤によく完成。改訂の経緯について配属先の理事長と校長に報告したうえで帰国の途に就くことができた。

## 派遣国の横顔

中川さんの教え子たちも例外ではなかった。中川さんがやがて感じるようになったのは、教え子たちに限らず、トンガ人と日本人では「記憶」の質が違うらしいということだ。授業中に伝えた宿題のことを、授業の終わりには忘れていく。「6時に迎えに行く」といった約束を忘れられてしまうのは日常茶飯事だった。しかしその一方で、「あんなに前のことを覚えているのだ」と驚かされることも少なくなかった。例えば、半年前に一度乗せてもらったタクシートの運転手が、「あなたの家はここだね」と覚えていた。そうして中川さんが立てた仮説は、「トンガの人々は印象的な体験についてはしっかりと記憶する」というものだ。

この仮説を踏まえて中川さんが授業に取り入れることにしたのは、「レアリア」の活用である。レアリアは「実物」を意味するラテン語で、語学教育の領域では、その言語が使われている新聞や音楽、ネイティブスピーカーなど、教材として加工されていないけれども教材として活用できるものを指す。中川さんは、授業に協力隊員を招き、教え子たちからトンガ料理を振る舞ってもらう時間を設けたり、教科書を離れて日本語の歌を教えたりしてみた。すると期待どおり、そうしたアクティビティの際に使った日本語については、数カ月経っても教え子たちの記憶に残っていることがわかった。

### 任地ひとロメモ 〈トンガタブ島・中央地区〉



大雨で冠水した中川さんの自宅周辺の道路。トンガはサイクロンや豪雨が頻繁に襲う地域だ



右：トンガ人の正装である腰巻「タオバラ」  
左：飛行機を利用して離島の中等学校に卒業試験の試験官として赴く中川さんたち



上：書道を学ぶ学生たち。トンガの中等教育の日本語授業では書道指導も取り入れられている



下：日本とトンガの人たちから「トンガ」をモチーフにしたTシャツを集め、展示するイベントを配属先で開催。日本の美術館が主催したものだ



日本語教授法の授業の一環として、同級生を相手に日本語の模擬授業を行う学生



2年間の協力隊活動

配属先：スコータイ県コミュニティ開発局

3. 再赴任後  
(2020年12月～21年1月)

- 帯の試作品の制作
- サンカローク焼きの体験プログラムの方向性に関する生産者たちとの確認
- YouTubeでのOTOP製品の広報

2. 一時帰国中  
(2020年3月～)

- サンカローク焼きの生産者とのウェブ会議による、体験プログラムのブラッシュアップ
- OTOP製品の伝統織物の技術を生かした新商品(帯)の開発に向けた勉強

1. 初赴任時  
(2019年1月～)

- 英語と日本語の観光パンフレットの作成
- OTOP製品の製作を体験するプログラムの開発(生産者たちとの協働)
- 観光資源の掘り起こしと商品化



①帯の試作品と生産者、小林さん(左端) ②サンカローク焼きの小鉢  
③小林さんが作成したサンカローク焼きの体験プログラムのポスター ④小林さんが作成したアンブームアン郡の観光パンフレットの表紙

Case 1

タイ/観光



小林美紀さん(2018年度3次隊)

●再赴任時の残りの任期…約2カ月間

■プロフィール

1993年生まれ。長野県出身。大学卒業後、長野県で地域づくりに取り組む会社の飲食店事業担当者などを経て、2019年1月に青年海外協力隊員としてタイに赴任。一時帰国、再赴任を経て、21年1月に任期を終了。

伝統工芸の  
製作体験プログラムや  
新商品を開発

一村一品運動などによる農村部の生計向上支援に取り組む県庁の部署に配属された小林さん。コロナ禍で観光業が中断するなか、先々を見据えて観光プログラムや観光客向けの新商品の開発に取り組んだ。

新型コロナウイルス感染症の拡大によって一時帰国することとなった協力隊員の再赴任が始まったのは、約8カ月後の2020年11月。戦陣を切つて再赴任した協力隊員たちに、一時帰国中に行っていた準備の効果、コロナ禍の中で可能だった取り組みなどについて伺った。

【初赴任時】

小林さんが配属されたのは、スコータイ県庁のコミュニティ開発局。同県はタイ族最初の王朝であるスコータイ王朝の都が置かれていた地であり、その遺跡を残すスコータイ歴史公園などを目当てに国内外から多くの観光客が訪れる。しかし、その経済的利益を享受するのは遺跡の周辺にあるホテルなどの観光施設に限られ、農村部は依然として生計向上が課題となっていた。そうしたなかでコミュニティ開発局が取り組んでいたのは、タイ政府が進める一村一品運動「OTOP」\*などで農村部の生計向上を支援することだ。県庁などによる審査を経てタイ内務省にOTOP製品として認定されると、そのマークを付けて販売することができる仕組みとなっており、スコータイ県では主に陶器や織物、金属細工が認定を受けていた。小林さんに求められたのは、OTOP製品の紹介を盛り込んだ英語と日本語の観光パンフレットを各郡についてつくること、OTOP製品の製作を体験する観光プログラムをつくること、およびOTOP製品のPRだった。

スコータイ県はコロナ禍を受けて観光客の呼び込みをストップしていたため、開発したサンカローク焼きの体験プログラムも実施に移せない状態となっていた。そこで、コロナ禍が収まった後のために、新たな体験プログラムもつくっておこうということになった。そうしてウェブ会議で生産者と議論を重ね、釉薬を塗って焼き上げるところまでを体験できるプログラムを完成させることができた。

伝統織物については、生産者たちに「せっかくなあなたと出会ったのだから、両国の伝統をかけた商品を開発してみたい」との希望を伝えられていたため、小林さんが日本にいての利点を生かして新たな商品の開発に挑戦することにした。スコータイの伝統織物の技術でつくる着物や浴衣の帯だ。帯について知識がなかった小林さんは、インターネットでその基本的な知識を得た後、織物産業で有名な京都・西陣の織物工房を回って、帯に合う色や模様について教えた。

OTOP製品の製作を体験する観光プログラムについては、一時帰国する前に2つの工房と共同開発を始めることができた。魚のモチーフの絵付けを特徴とする陶器「サンカローク焼き」の工房と、幾何学文様を特徴とする伝統織物の工房だ。県内のOTOP製品の生産者が集まる会議で体験プログラムの共同開発を呼びかけた際、手を挙げてくれた所だった。サンカローク焼きについては、ろくろ体験と絵付け体験の2つのプログラムの段取りや料金を固めるころまで進み、これからPRを始めようという段階で、伝統織物についてはアイデアの交換をし始めた段階で、小林さんの一時帰国が決まった。

【一時帰国中】

一時帰国中に小林さんが取り組むことにしたのは、協働していたOTOP製品の2工房とオンラインでやりとりしながら、彼らとの活動すると、ホテルなど観光関連の業者は客の減少で軒並み大きな打撃を受け、危機感を抱いていた。そうしたなかで取り組めるのは、コロナ禍後を見据えて観光資源を磨いておくことだけだった。

再赴任時の残りの任期はわずか2カ月弱。そこで、伝統織物の技術でつくる帯の試作品づくりに活動的に絞った。模様を帯の全面に織り込むのは膨大な時間がかかってしまうことから、前面とお太鼓の部分だけに模様を織り込むことにした。小林さんは毎日のように工房に通い、西陣で学んできた技術を生産者たちに伝達。任期終了までに完成に漕ぎ着けることができた。

一時帰国中も彼らとはウェブ会議で商品開発の話し合いを進めていたが、帯に関する細かな情報がないと思うように伝わらないことがあった。再赴任後のコミュニケーションではそのようなもどかしさはなく、小林さんはあらためて、ものづくりの協働をオンラインだけで進めることには限界があると感じた。

任期中に帯の商品化の仕上げと販路開拓まで進むことはできなかったため、小林さんは帰国後にそのフォローをしようと計画。新潟県で地域おこし協力隊員として地域づくりの仕事に取り組みかたわら、スコータイの伝統工芸品を販売するサイトの立ち上げを進めている。

【再赴任後】

再赴任が叶ったのは20年11月。タイにおける人口あたりの感染者数が日本の15分の1程度という時期だった。しかし、スコータイ歴史公園を中心とする観光エリアの状況を確認



2年間の協力隊活動

配属先：スパイリエン中学校

3. 再赴任後  
(2020年12月～21年1月)

- 新指導書の活用に関するアドバイス
- 同僚の体育科教員に向けた、体育授業のポイントを伝える講習の実施

2. 一時帰国中  
(2020年3月～)

- 中学校での特別指導員としてのアルバイトを通じた、日本の体育授業についての勉強
- 新指導書を作成したNGOが新たに作成する参考書に関するアイデアの提供

1. 初赴任時  
(2019年1月～)

- CPへの技術伝達
- 新たに導入された教員向け指導書の活用に関するアドバイス
- 陸上競技部の指導



- 1 体育授業に新たに導入された体力測定で、長座体前屈の測定をするCP
- 2 水道管パイプを加工してつくったハードル
- 3 木の枝を使ってやり投げの指導を行うCP
- 4 再赴任後、同僚の体育科教員たちに新指導書の要点を伝える講習を行う西原さん



にしはらだいじろう  
西原大二朗さん(2018年度3次隊)

●再赴任時の残りの任期…約2カ月間

■プロフィール

1995年生まれ、東京都出身。日本体育大学在学中に中・高等学校の教員免許状(保健体育科)を取得。卒業後の2019年1月、青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任。一時帰国、再赴任を経て、21年1月に任期を終了。

## 体育教育に導入された 教員向け指導書の 活用法を指導

中学校に配属され、体育授業の質向上を支援した西原さん。当初は授業自体がほとんど行われていなかったが、体育授業に熱意を持つCPとの共同授業を足掛かりに、配属先における体育授業の底上げを図った。

### 【初赴任時】

西原さんの配属先は、3学年にそれぞれ30人ほどのクラスが十数クラスある全校生徒約1300人の中学校。求められていた活動は、体育授業の質向上を支援することだった。中学校の体育授業は国がカリキュラムを設置。配属先の時間割には、各クラス週2コマずつの体育授業が組み込まれており、学年ごとに別々の専任教員が配置されていた。しかし、彼らには体育の専門教育を受けた経験がなかった。しかも西原さんの着任当時、熱心に体育授業を実施しているのはカウンターパート(以下、CP)となった1年生担当の男性教員のみで、他の教員は授業がおざなりになっていたが、学校側もそれを黙認していた。

カンボジアの学校の年度開始は11月で、西原さんの着任は2018年度の1学期の中盤。西原さんは、18年度は1年生の体育授業の約半分を単独で実施する一方、1年生の残りの授業をCPと共同で実施することで、彼に授業運営の技術を伝えていった。共同授業の進行はCPが担当。西原さんは必要なアドバイスをするという形をとった。

CPが当初行っていた授業は国のカリキュラムには則っておらず、自分が持つ知識でも対応が容易なカンボジアの「ラジオ体操」にあたるク

### 【一時帰国中】

新卒で協力隊に参加した西原さんは、「生徒の秩序が保てない」など担当する体育授業で困難が生じた際に、打開策を考えるための足掛かりとなる授業運営の実践経験がなかった。そこで頼りにしたのは、インターネットで得られる情報だ。指導案の例などを調べ、自分が児童・生徒として受けてきた授業の記憶を呼び戻そうと努めた。西原さんは一時帰国中、日本の体育授業についてさらに勉強を深める良いチャンスだと考え、日本の中学校で特別指導員としてアルバイトをさせてもらうことにした。そうして、チャンスを見てはその学校の体育授業を見学。「こういうやり方もあるのだ」「自分の考え方は間違っていないのだ」といった多くの学びが得られる機会となった。

例えば、一時帰国する以前、配属先に「ハードル」がなかったことから、西原さんは水道管パイプを加工して自作。さらにそれを使って高跳びの練習をさせていた。一方、アルバイト先の学校では、跳び箱とそのジャンプ台を使い、高跳びの感覚を養わせる授業が行われていた。それを見て、目的を達成するためならば、競技の原形にこだわらずさまざまな工夫をして構わないのだとの確信を持つことができた。

メール体操やサッカーなどばかりをさせていた。そうしたなかで西原さんはまず、同じサッカーの授業をするにしても、練習方法に「競争」の要素を加えるなどして生徒たちの興味を引き出す方法を伝授。さらにその後、陸上競技やバレーボールなど、カリキュラムにあるほかの競技の指導方法も伝え、取り入れてもらうようにしていった。

西原さんとの共同授業を通じてノウハウを得て自信が増したことで、体育授業に対するCPの熱意は顕著に高まった。19年10月に新年度が始まると、他の体育科教員を集め、授業を時間割どおり実施するよう訴えた。するとようやく、他の体育科教員たちも手を抜かずに授業を行うようになっていった。

新年度にはもう1つ大きな変化があった。JICAの「草の根技術協力事業」によって日本のNGOが作成した中学校の体育授業の教員向け指導書が国に採用され、専門知識が不足していた体育科教員たちの新たな拠り所が出来たことだ。「体力測定」をはじめ、新指導書に盛り込まれている事柄について、西原さんは体育科教員たちに実践の具体的な要領を伝えていった。コロナ禍で西原さんが一時帰国となってしまったのは、配属先の体育授業が全体として盛り上がり始めた矢先のことだった。

### 【再赴任後】

再赴任が叶ったのは、配属先が新年度に入ってからでもない20年12月。残りの任期は2カ月となっていた。カンボジアにおける人口あたりの感染者数が日本の50分の1程度という時期だったが、当時はまだ学校が閉鎖。それが解除され、配属先で活動を行うことができたのは1カ月にも満たなかった。日本からウイルスを持ち込んだのではないかと警戒されることも多かったが、PCR検査は陰性だったと粘り強く伝えたところ、配属先の人たちと以前と同じように付き合うことができ、マスクさえしていれば、以前とほとんど変わらない活動が可能だった。

限られた時間で取り組んだことの1つは、前年度に初めて導入された体力測定のパフォーマンスだ。測定の様子を見て回り、やり方が間違っている場合は正しいやり方を指導した。もう1つは、一時帰国の前に体育授業を積極的に実施するようになっていった同僚の体育教員たちに、一時帰国中にアルバイト先で学んだことを踏まえ、体育授業のポイントを伝えることだ。予想外だったのは、コロナ禍のなかでリスクを厭わず戻ってきた西原さんに対して、同僚教員たちが以前より信頼を強め、より積極的な話に耳を傾けてくれたことだった。



2年間の協力隊活動

配属先：ロンアン省総合病院

3. 再赴任後  
(2020年11月～21年4月)

- 5S活動の推進支援
- 新型コロナウイルス感染症の予防啓発を目的とした動画の作成（他隊員との協働）

2. 一時帰国中  
(2020年3月～)

- 再赴任後に向けた、勉強会の資料作成
- 配属先以外のベトナムの病院を対象とするオンライン勉強会への参加
- 日本国際看護学会での活動報告

1. 初赴任時  
(2019年4月～)

- 配属先内の各診療科の監査
- 監査で明らかになった看護技術や衛生管理・安全管理の問題の解決支援



- ①5S活動による改善がなされる前の点滴カートの管理。器材室での置き場所が定められていなかった
- ②5S活動による改善がなされた後の点滴カートの管理。置き場所が定められ、それを示す印も貼られるようになった
- ③院内監査の際に、看護技術に関するアドバイスをを行う大森さん
- ④再赴任後、5S活動に関する勉強会を行う大森さん



## 病院内の各診療科の 監査で問題を把握し、 その解決に尽力

総合病院に配属された大森さん。再赴任後は、新型コロナウイルスの感染予防に対する同僚たちの関心の高さを感じたことから、感染予防につながることを強調しながら5S活動の推進に取り組んだ。

【初赴任時】

大森さんの配属先は、病床数約900床の総合病院。所属は、看護師の管理全般を担う「看護部」と、5S活動などを通じて院内の安全面や衛生面の管理を担う「品質管理部」の2つだ。両部の共通の課題である看護業務の質向上を支援することが、求められていた役目だった。

両部は従来、それぞれで院内の各診療科を回って業務の状況を監査。しかし、内輪の監査であるがゆえ、甘くなってしまうという限界があった。そこで大森さんは、自身も別途監査を行い、「外部」の目で問題を探ることを提案。両部の部長から了承を得られたことから、最初の活動として着手することとなった。

看護師たちの技術にはさまざまな問題があったが、着目したのは「点滴静脈注射」の技術だ。点滴静脈注射は静脈内に直接薬液を投与する治療法で、即効性がある反面、不適切なやり方によって患者の生命を奪ってしまうリスクもある。ところが、配属先の看護師たちはそのリスクの軽視が顕著だった。例えば、1分間に何滴投与するかは医師が安全性を考慮して指示を出すのが、看護師たちは早く点滴を終えるため、指示を超えたスピードに設定。監査を通じて明らかにした問題については、看護部長に報告したうえで、勉強会を

開いて看護師たちに改善を促していた。

看護師たちの点滴静脈注射のやり方に改善の兆しが見えるようになった任期の半ばには、5S活動の支援に活動の軸足をシフトしていった。医療機関への5S活動の導入は、ベトナム保健省が推進しようとしていたが、配属先では停滞していた。

まずは「一点集中」で5S活動の導入に弾みをつけようと考えた大森さんは、点滴に必要な物品を載せて病室に運ぶ「点滴カート」の管理に狙いを定めた。点滴カートは使いっぱなしのまま器材室に戻されている状態や、載せている物品をきれいにしてお定の保管場所に戻すということがなされていなかったため、それを介した感染が起こる可能性が高かった。そのため、まずは各診療科を回って点滴カートの管理状況をチェック。問題を具体的に把握したところで、早速一時帰国しなければならぬこととなってしまった。

【一時帰国中】

一時帰国してまもない時期、所属する両部の部長とウェブ会議などで連絡をとり、配属先のために日本でできることを探った。しかし、「コロナ対策で忙しく、協力隊員のことを考える余裕がない。ベトナムに戻ってきてからその先のことを話し合

おう」と伝えられた。そこで大森さんは一時帰国中、彼らの手を煩わせることなくできる活動に取り組むことにした。

その1つは、再赴任後に向け、点滴カートの管理に関する勉強会の資料を作成すること。もう1つは、配属先以外の病院のスタッフを対象とするオンラインの勉強会への参加である。他の協力隊員がかつて配属されていた病院のリハビリ部門から、「引き続き協力隊員の力を借りたい」とのリクエストがJICAベトナム事務所に寄せられたことから、保健・医療分野の協力隊員たちと共同で開催したものである。「コロナ禍になり、それまで患者の介護を担っていた家族が病院に入ることが禁止されるようになったため、患者の転倒や転落が増えてしまった」という問題を聞いたことから、大森さんはその予防法に関する講義を行った。

【再赴任後】

再赴任が叶ったのは、残りの任期が4カ月ほどとなった20年11月。ベトナムにおける人口あたりの感染者数が日本の80分の1程度という時期だった。新型コロナウイルスの感染者を隔離する施設が設けられたり、看護師のために防護服装着のマニキュアが作成されたりはしていたが、その他の点では一時帰国の前と変わ

りなく業務が進められていた。再赴任すると、同僚看護師たちからよく、日本の医療現場ではどのようなコロナ対策がとられているかを尋ねられた。日本の医療現場のあり方に対する彼女たちの関心が一時帰国前より高くなっていると感じた大森さんは、5S活動がコロナ対策にもなるということに着目し、点滴カートの管理方法だけでなく、5S活動でより広く業務改善を図るための支援に取り組むことにした。

しかし看護師を対象に5S活動の勉強会を開いてみたものの、思いのほか興味を示してもらえなかった。そこで「5S活動は新型コロナウイルスの感染予防につながる」と強調。すると俄然、興味を示すようになった。そうして、わずか1、2カ月の間で、点滴カートを使った後は載せている物品を消毒して整頓することなどが徹底されるようになった。コロナ禍は病院への5S活動導入のチャンスだと実感した大森さんは、配属先以外の病院のスタッフを対象にした5S活動のオンライン勉強会を開きたいと考えた。しかし、打診した病院から「コロナ対策で忙しく、対応は難しい」と言われ断念。代わりに、後に他の病院の参考にしてもらおうと、SNSで配属先の5S活動の様子をベトナム語で発信したところ、大森さんの任期は終了となった。



2年間の協力隊活動

配属先：ベオグラード障害者スポーツ協会



Case 4

セルビア／障害児・者支援



みやぎゆうや  
宮城勇也さん(2018年度3次隊)

●再赴任時の残りの任期…約1カ月間

■プロフィール  
1994年生まれ、沖縄県出身。日本福祉大学で特別支援教育と障害児心理を学んだ後、児童心理司として児童相談所に勤務。2019年1月、セルビア初の青年海外協力隊員として同国に赴任。一時帰国、再赴任を経て、21年1月に任期を終了。

スポーツを通じた  
障害者の社会参加に向け  
指導員として活動

障害者を対象に各種スポーツ競技のクラスを運営する団体に配属された宮城さん。任期の半ば、自身が得意とするテニスのクラスを立ち上げたところで、一時帰国しなければならぬこととなってしまった。

【初赴任時】

宮城さんの配属先は、セルビアの首都ベオグラードにあるベオグラード障害者スポーツ協会。市内の障害者を対象とするスポーツクラスを運営する団体だ。宮城さんの着任当時、水泳や卓球など特定の競技に特化して指導するクラスや、さまざまな競技を指導する子ども向けの運動クラスが設けられており、約300人の知的障害者や身体障害者が利用者として登録されていた。その年齢は幼児から高齢者まで幅広く、運動能力も歩行訓練をしているレベルからパラリンピックに出場するレベルまでさまざまだった。

クラスの指導員として配属先に所属していたのは約10人。大半は特別支援教育とスポーツ学を学んでおり、何らかの競技の経験もあった。セルビアではまだ障害者が働ける機会が少なく、社会参加は進んでいなかったが、同僚指導員たちには「スポーツは障害者の社会参加の手段となる。その後押しをしよう」という意識が強く、しつかりとしたクラス運営がなされていた。そうしたなかで宮城さんが立てた活動方針は、何かを彼らに教えようとするのではなく、指導員として彼らと同じようにクラス運営にあたること。宮城さんはセルビアに初めて派遣された青年海外協力隊員。まじめに働き、日本

【一時帰国中】

一時帰国した当初、セルビアでは厳しい外出制限が課せられたため、配属先のスポーツクラスはすべてストップ。そこで配属先と一緒に取り組んだのは、障害者が家で家族の支えを受けながらできるトレーニングの方法を紹介する動画を作成し、YouTubeに投稿することだった。外出制限により体を動かす機会が減るなか、障害者が自力で健康を維持する方法を考えたり実践したりするのは難しい。そうした問題の対策として、配属先の利用者の家族に参考してもらおうと取り組んだ活動だった。

一時帰国して4カ月経った20年7月には、配属先のスポーツクラスがようやく再開。しかし、障害者へのスポーツ指導は個々の障害の状態に応じた「手取り足取り」でなければ難しいため、スポーツクラスの支援をオンラインで行うのは不可能だった。そこで宮城さんは、再赴任が叶うまでの期間、日本で暮らす外国人の支援に携わることで、セルビアでの経験を生かすことにした。セルビアで知り合った元JICA専門家からの誘いを受け、彼が立ち上げた外国人技能実習生の監理団体でアルバイトとして働くことにした。任期終了後の就職先に選んだのもこの団体だ。

人についてネガティブなイメージを植え付けてしまわないようにするのが自分の最大の役目だと考えた。

宮城さんが当初加わったのは、主に水泳クラスと子ども向け運動クラスだ。同僚指導員と共に利用者への指導にあたった。また、ハーフマラソンの大会が開かれた際には、配属先を利用する車椅子ユーザーの伴走を買って出たりもした。そうして1年ほど経つと、同僚指導員たちからの信用が確立し、「自由に活動して構わない」と言われるようになった。そこで立ち上げたのは「テニスクラス」だ。

セルビアは、世界ランキング1位の通算在位期間が歴代最高の男子プロテニス選手、ノバク・ジョコビッチ選手の出身国。同国のスーパースターだが、配属先にはテニスクラスがなかった。宮城さんは小学生のときから大学時代までテニスをやっており、協力隊に応募する際はジョコビッチ選手の出身国ということでセルビアの案件を志望。テニスクラスの立ち上げは着任時から温めていたプランだった。テニスの経験がある同僚指導員はいなかったことから、クラスは宮城さんが主担当として運営することとなった。

新型コロナウイルス感染症の拡大によって一時帰国せざるをえなくなったのは、テニスクラスを立ち上げた矢先のことだった。

【再赴任後】

再赴任が叶ったのは、残りの任期が1カ月ほどとなった20年12月。セルビアにおける人口あたりの感染者数は日本より多いものの、病床使用率は低く、専用病院が新設されるなど医療体制が強化されている時期だった。スポーツクラスは開いていたが、感染を警戒する利用者の家族は多く、参加するのは登録者の3分の1程度という状態。しかも、感覚に過敏な障害者はマスクを付けることが難しかったため、対面の指導は難しい。結果、宮城さんは任期を終えるまでの間、一時帰国前に立ち上げたテニスクラスの運営を含め、できる活動は限定的だった。

マスクを付けて行うことができない水泳は、クラスが完全に閉鎖。再赴任するまでは、東京2020パラリンピックに出場予定の2人の選手に最後の指導をして任期を終えたいと考えていたが、叶わなかった。代わりに、セルビアの未来のパラリンピックをパラリンピックの会場に招くプロジェクトを計画したが、実現の見込みは立たなかった。

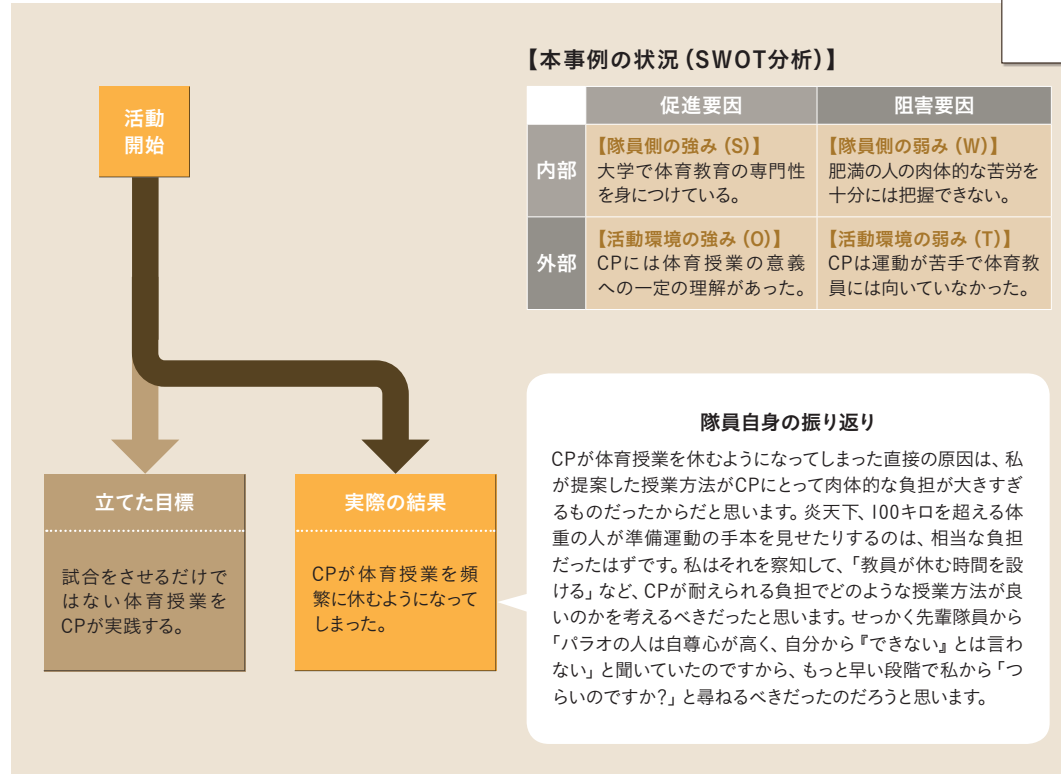
そうして宮城さんが任期終了までの間に取り組んだのは、活動の締めくくりとして引継書を作成すること。それまでに実施したクラスの様子や改善すべき点などをまとめ、配属先に託して帰国の途に就いた。



# “失敗”から 学ぶ #191



## 事例整理



## 当初は意欲を見せた同僚教員が 次第に体育授業を放棄するように

話 川道明子さん(旧姓：桑原 / パラオ・小学校教育・2018年度1次隊)

30人ほどのクラスが各学年に3、4ずつある小学校に配属され、各クラスで週に1コマずつある体育授業の支援に取り組んだ。学級担任制の学校だが、体育授業には2人の専任教員が配置されていた。いずれも体育教育の専門性はなく、1人は3年前に、もう1人は1年前に体育担任になった教員だった。私のカウンタパート(以下、CP)となったのは、3年前に体育担任となった40代の男性教員。体重が100キロ以上あり、体を動かすことを得意としない人だった。CPの担当は3、4年生で、水曜日に3年生の4クラス、木曜日に4年生の4クラス、の体育授業があった。私はほかの曜日にある1、2年生の授業を受け持った。CPの授業を支援することになった。

私が着任した当時、CPは野球のボールとバットを児童に渡し、好きに試合をさせるような授業ばかりをしていた。児童も「体育授業は遊びの時間」と捉えている様子だった。私は体育授業の方法がわからないのだからと判断し、「授業の冒頭では教員が手本を示しながら準備運動をする」「試合をさせる前に個々の技術の説明をし、その練習をさせる」といっ

た基本的な方法を伝えた。するとCPから「手本を見せてほしい」と要望されたことから、水曜日と木曜日の最初の2クラスの授業は私が行うことになった。体育授業に対する児童たちの積極性が増すと、CPは体育授業への意欲が向上。「今後は3、4年生のすべてのクラスの授業を私が担当するので、改善点をアドバイスしてほしい」と申し出てくれた。ところが、2カ月ほど経つとCPが「病院に行く」などと言って授業を休むようになってしまった。準備運動をしただけで息切れし、座り込んでいたので、体力的にきついことはわかった。しかし、もう少し経てば体を動かすことに慣れるだろうと私は考えた。校長に相談すると、「以前の彼と比べると、あなたが来てからはとても一生懸命に授業をするようになった。少し様子を見てはどうか」とアドバイスされたため、私は休むことをとがめるのは差し控えた。

しかしその後、休む頻度は増加。授業の内容を負担が軽いものに変えることを打診しようと思ったが、その矢先にCPは家庭の事情で休職しなければならぬこととなり、そのまま私の任期は終わってしまった。

©

## 他隊員の分析

### 現地に合った授業づくり

私は協力隊時代、それまで現地にはなかった「運動会」を企画・開催しました。現地の教員たちは当初、あまり協力的ではありませんでしたが、競技内容などについて何度も意見を求めたところ、次第に主体性を持ってくれるようになりました。本事例のように、協力隊員が授業の手本を見せることは、現地の教員に授業の具体的なイメージを持ってもらうために有効だと思います。そのうえで、協力隊員が提案する授業の方法をどこまで取り入れることができるのか、現地の状況を協力隊員より理解している現地の教員に意見を聞き、現地で実践可能な授業の形へとカスタマイズしていく作業が重要なのだと思います。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・小学校教育・2016年度派遣
- 活動概要：視学官事務所に配属され、図工と体育の授業の定着を支援。

### 寄り添うことで自信を引き出す

私の協力隊時代の任地でも、「体育授業は遊びの時間」と捉える教員や児童・生徒がほとんどでした。着任当初、日本と比較して「体育授業はこうあるべき」と授業の改善ばかりを求めてしまったところ、相手にしてもらえませんでした。そこで、現地の教員のもっと近くに寄り添って活動することにしました。例えば、彼らに無理のない範囲で、授業計画を自分で考えてもらうようにしました。すると次第に、「こういう授業だったら私にもできる」と自信を持って授業に取り組むようになり、授業内容も向上していきました。そうした経験を通して、寄り添いながら「自信」を引き出すことが大切なのだと感じました。

文＝協力隊経験者

- アジア・体育・2017年度派遣
- 活動概要：県教育事務所に配属され、中・高等学校などを巡回して運動部の競技力向上などを支援。



2年生のクラスで体育授業を行う桑原さん



### PROFILE

1989年生まれ、宮城県出身。宮城教育大学初等教育教員養成課程体育・健康コースを卒業後、教諭として小学校に勤務。2018年7月に青年海外協力隊員としてパラオに赴任(現職参加)。20年3月に帰国し、復職。

### 活動概要

- コロール小学校(コロール州)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 体育授業の実施
  - 体育授業に関する同僚教員への助言
  - 放課後アクティビティの企画



派遣人数は少ないもの  
いぶし銀の活躍をする  
職種の事例をピックアップ

#H104

## 高齢者介護

派遣中 ▶ 0人

累計 ▶ 61人

分類 ▶ 社会福祉

活動例 ▶ 生活支援やリクリエーションなどの支援を行う

類似職種 ▶ ソーシャルワーカー

※人数は2021年4月末現在。



高齢者クラブで介護予防体操の指導をする大室さん(左から2人目)

### PROFILE

1986年生まれ、兵庫県出身。大学卒業後、介護福祉士として高齢者施設に勤務。2018年1月、青年海外協力隊員としてタイに赴任。20年1月に帰国。現在はひょうご外国人介護実習支援センターで、介護職に就く外国人の支援に従事。

### 活動概要

パッタラン県ムアンパッタラン郡カオチアック町の役場に配属され、主に以下の活動に従事。

- 介護予防体操の制作・普及
- 高齢者が制作した民芸品の販売支援
- 看護師、保健ボランティア、高齢者の家族への介護方法の指導



おおむろともよ  
大室知世さん  
(タイ・2017年度3次隊)

#H116

## 病院運営管理

派遣中 ▶ 0人

累計 ▶ 27人

分類 ▶ 保健・医療

活動例 ▶ 保健医療施設管理や医療サービスの向上に寄与する活動

類似職種 ▶ 公衆衛生、保健師、看護師など

※人数は2021年4月末現在。



配属先の幹部会議のメンバーが開いてくれた原さん(中央)の送別会

### PROFILE

1954年生まれ、熊本県出身。大学卒業後、エンジニアリング会社の社員としてイラクやサウジアラビアでの事業に携わった後、医療コンサルティング会社を設立。勤続30年を機に2018年4月、シニア海外協力隊員としてザンビアに赴任(現職参加)。20年3月に帰国。

### 活動概要

ルサカ州ルサカ郡のマテロ1次レベル病院に配属され、病院の運営に関する主に以下の活動に従事。

- 幹部職員の能力強化支援
- 年次計画策定や予算編成の支援
- 診療の質を評価する仕組みの整備支援



ほらたかし  
原隆さん  
(シニア海外協力隊員/  
ザンビア・2017年度4次隊)

Q メインの活動は？

配属先の病院では、幹部職員の指導力不足が顕著でした。そこで私が力を入れたのは、人づくりや組織づくりを通して経営基盤を強化する活動です。例えば、財務や業務量などの月次データをグラフなどで表したマンスリーレポートを発行し、病院運営の「見える化」を図りました。また、約40人の幹部職員を対象に、「BSC」の手法を学んで「ビジョンメイキング」の力を養うワークショップも開きました。幹部職員が病院のビジョンと戦略を描けるようになった後は、その実現に必要な人づくりや組織づくり、例えば幹部会議の議題に「財務」を組み込み、その議論をフォローすることなどに取り組みました。財務の議論は当初「物が足りない」といった問題は挙がるものの、その解決策の検討には至らずに終わっていましたが、やがて月次データをもちに問題の解決策が検討されるようになりました。

Q 活動の最大の困難は？

私が提案した病院運営の改善策の効果が定着するためには、病院が自分たちでそれをサポートしていく仕組みを持つことが必要となります。そこで、各部門の若手職員と院長からなる「経営企画室」を設置し、マンスリーレポートの作成や、幹部会議で決定された改善策の実践指導などを担ってもら

うことにしました。しかし、メンバーの他機関への異動が重なるうちに、経営企画室は機能しなくなりました。

Q どう対応しましたか？

若手職員によるボトムアップのやり方は難しいと考えて経営企画室を解散し、幹部会議を司令塔としてトップダウンで改善策の実践指導などを行ってもらうようにしてみました。すると、幹部職員に自覚や責任感が生まれ、改善策の実践結果のモニタリングが定着するなどの効果が現れました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

看護師の経験がある方が「病院運営管理」の職種で協力隊に参加する場合、医療サービスに詳しいという強みを生かして、その質の確保に向けて5S・KAIZENを支援する活動例が多いようです。一方、私は医療コンサルタントとしての経験があったので、「経営基盤づくり」にフォーカスを当てて活動しました。このように、「病院運営管理」はバックグラウンドによってさまざまなアプローチが可能な職種だと思います。どのようなバックグラウンドであっても共通して重要なのは、「配属先の病院を地域の宝にするのだ」というくらい強い思いでしょう。それがあれば、困難に直面しても必ず道は開けると信じています。

Q メインの活動は？

人口約5000人のうち2割を60歳以上が占め、高齢化が進みつつある町の役場が配属先でした。特に力を入れたのは、町内の約10カ所にある高齢者クラブを巡回し、介護予防体操を普及することです。着任直後に町の高齢者70人を対象に実施したアンケートで、運動に関心がある方が多いと知ったことから取り組んだ活動です。3カ月ごとに実施した高齢者対象の体力測定では、どの項目もわずかながら上昇傾向が見られたことから、一定の効果があつたようでした。

Q 活動での最大の困難は？

派遣前に勤務していた高齢者施設では介護予防体操を行っていたので、それを紹介する教室を企画し、高齢者クラブや町のクリニックで私がインストラクターとなって開催したのですが、当初は参加してくれる方がほとんどいなかったことです。

Q どう対応しましたか？

介護予防のために体操をするというところは町の方々に馴染みがなく、その意義がよくわからないから興味を持ってもらえないのだろうと考えました。そこでまず、日本の介護予防体操を紹介することをやめ、高齢者クラブの責任者を務めている方々に介護予

防体操の意義を伝えようとして、それを踏まえたオリジナルの体操を彼らに作成してもらったことにしました。そうすることで、現地の高齢者が楽しめる体操を考案してもらえたり、体操の意義をクラブのメンバーにわかりやすく伝えてもらえたりするだろうと考えたからです。また、「今より健康になったら何をしたいか」を事前に書き出して体操に取り組み目標を意識化してもらったり、3カ月ごとに体力測定を実施することで体操の効果の可視化を図ったりもしました。すると、高齢者クラブの体操教室は十数人が継続して参加してくれるようになりました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

協力隊の派遣国のなかには、「介護」という業種がまだない国も少なくないかと思っています。そうした国では、「私は日本で『介護』の仕事をしていて」と説明しても、「それでいったい何ができるのか？」と問われてしまう場面もあるかと思っています。一方で、現地の高齢者の生活や健康については協力隊員よりも現地の方々のほうがよくご存知であり、高齢者の支援方法については協力隊員が思いつかないようなアイデアを出してもらえることもありませう。そのため、現地の方々の知恵を積極的に借りる姿勢が、高齢者介護の職種ではとても重要だと思います。

\*1 BSC…「Balanced Scorecard」の略。企業のビジョン・戦略をバランスよく達成するため、「財務」の視点だけでなく、「顧客」や「業務プロセス」などの視点でも指標を設定して行う業績評価手法。  
\*2 ビジョンメイキング…組織のメンバーのモチベーションを高めるため、幹部が組織のビジョンを設定すること。





## 電子書籍のセルフ出版

ナビゲーター = 佐藤省吾さん  
(ボツワナ・コンピュータ技術・2015年度1次隊)

文章や写真などを自分で電子書籍にまとめ、Amazon上で販売することができる「Amazon Kindle ダイレクト・パブリッシング」(以下、KDP/右のQRコード)というサービスがあります。私が所属する「青年海外協力隊大阪府OB・OG会」では、これを利用して協力隊の派遣国の料理を紹介する電子書籍『くらして初めて知った(ど) ローカルごはん』(以下、『ローカルごはん』/下のQRコード)を出版しました。紙媒体の自費出版は代行業者を利用するのが一般的ですが、最低でも数十万円の初期費用がかかります。KDPはそれが不要で、売り上げの一部が手数料として差し引かれるという仕組みであるため、書籍出版の敷居がぐっと下がります。そこで、KDPの利用手順をご紹介します。



『ローカルごはん』の表紙

### ①レイアウト作成の方法を決定する

ページのレイアウト(文章や写真などの配置)を組む方法について、KDPでは2つの選択肢があります。1つは小説など主に文章で構成される書籍に合ったもので、著者はレイアウトの指定をせず、自動的に文章が読みやすいレイアウトで表示されるようにする「リフロー型」です。もう1つは、写真などを多く用いる書籍に合ったもので、著者が指定したレイアウトのとおりに表示されるようにする「固定レイアウト型」です。『ローカルごはん』では、料理の写真を多用したかったので後者を選択しました。

### ②文章や写真などを電子書籍の形に変換する

文章や写真などをKDP用の電子書籍の形に変換する作業は、「Kindle Create」という無料のソフトウェアを使えば、以下のように簡単に行うことができます。リフロー型の場合は、文章を打ち込んだWordファイルが電子書籍の形に変換されます。固定レイアウト型の場合は、文章や写真などを配置した各ページのPDFファイルが電子書籍の形に変換されます。目次の設定などはKindle Create上で行います。電子書籍の形に変換したものは、各種端末で表示を確認することができます。修正が必要



Kindle Createで編集中の『ローカルごはん』

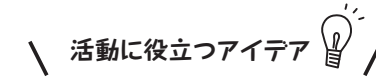
な箇所があれば、元のファイルを修正し、Kindle Createに再度読み込ませます。修正が完了したら、電子書籍のデータを「KPF」というフォーマットのファイルで保存しておきます。

### ③アップロードする

電子書籍のデータをインターネット上にあるKDPのサーバにアップロードする作業は、KDPのウェブサイトにある「本棚」というページで行います。AmazonアカウントでKDPのウェブサイトにログインしたら、まずはロイヤリティ(利益)の受け取り方など出版に関する情報を登録します。次に「本棚」を開いて「新しい本を作成」をクリックし、タイトルや著者名など書籍に関する情報を入力します。それが完了したら、電子書籍のKPFファイルをアップロードします。

### ④出版する

電子書籍のデータをアップロードすると、Amazonによって出版の可否の審査が行われ、それにパスすると晴れて販売開始となります。その後、修正したKPFファイルをアップロードし直して訂正することは可能ですが、「訂正が大規模だ」とAmazonに判断された場合は、新たな版として出版しなければならなりません。そのため、事前の確認作業をしっかりとっておくことをお勧めします。売れ行きはKDPのウェブサイトですぐ確認することができます。



## ポッチャ入門②

ナビゲーター = 浅見明子さん  
(ネパール・障害児・者支援・2017年度1次隊)

### 道具を手づくりする方法

公式戦でなければ、手づくりの道具だけでプレーできるのもポッチャの特長です。そこで今回は、ポッチャの主な道具を特別な材料や技術を使わずに手づくりする方法をご紹介します。各道具の概要は前回の記事(2021年5月号P.22)をご参照ください。

#### 【ポッチャボール】

公式ルールで規定されているのは「重さが263~287グラム」「周長が262~278ミリメートル」の2点だけであり、中に詰める物や表面を覆う物の素材に制約はありません。規定の周長では容積が330ミリリットル前後の球になり、水を入れてつくったら規定の重さを少しオーバーするようなサイズです。そのため、公式戦で使われるポッチャボールは水より軽いプラスチックの粒を革に詰めたものが一般的です。しかし、プラスチックと同じような重さの素材を身近で入手するのが容易ではない協力隊員も多いかと思えます。そこでここでは、どこでも入手が容易な砂(水より重い)の中に詰め、重さのみ公式ルールの規定を満たすようにしたポッチャボールのつくり方をご紹介します。入手や細工が容易ではない革の代わりに、くしゃくしゃにした紙で包んで強度を出します。重さや大きさが異なると転がり方も異なりますが、同じ試合で使うポッチャボールをすべて同じ方法でつくり、重さや大きさを揃えさえすれば、それらが公式ルールの規定に沿ってなくても公平性の点で問題はありません。

#### ▶材料(1個分)

- ・砂…250グラム程度
- ・ビニール袋…1枚
- ・紙(A4サイズ程度)…1枚
- ・布テープ…適宜

#### ▶つくり方

- ①砂をビニール袋に入れ、少し空気が入っている状態で閉じる。
- ②紙をくしゃくしゃにして①を包む。
- ③3~5センチ程度の幅に切った複数枚の布テープで②の表面



手づくりしたポッチャボールを手にするネパールの子どもたち

を覆いながら、球体に整えていく。

#### ▶ポイント

- ・土のように粒子が細かな物を詰めると転がりづらくなります。公式戦で使われるポッチャボールに詰められているのは米粒大のプラスチック片です。
- ・空気が少し入っている状態でビニール袋を閉じるのは、重心の偏りを減らし、スムーズに転がるようにするためです。
- ・計量器がない場合は、同じ容器を使って同じ量の砂を詰めていくことで、重さと大きさが同じポッチャボールをつくってください。砂250グラムはおおむね170ミリリットル程度です。
- ・公式ルールでは、「的球」「先攻の自球」「後攻の自球」がそれぞれ「白色」「赤色」「青色」と決められています。しかし、公式戦でない限り、「誰が投げた球か」がわかるようにしておきさえすれば用は足ります。そのため、白色・赤色・青色の布テープが入手できない場合には、サインペンなどで表面に色を塗ったり印を付けたりして見分けが付くようにしておけば十分です。

#### 【パドル】

うちわ型のパドルで審判員が次の攻撃側を示すのは、言わばポッチャの名物です。なくても競技は可能ですが、うちわやうちわに似た形の物にテープやサインペンで色を付けるなどして、ぜひ手づくりしてみてください。



浅見さんが協力隊時代に段ボールとテープで手づくりしたパドル

#### 【ランプ】

公式戦では、滑り台のように両脇に壁があり、溝にすっぽり球が収まって狙い通りの方向に転がるようにしたものが使われます。しかし、そうした形態のものをつくるのは容易ではないので、まずは身近にある板状のもので代用してみてください。重度の障害がある人でも、それで十分競技に参加し、楽しむことができると思います。



切った段ボールをランプにして競技する様子



before  
保育士養成校の教員

after  
通信制高校のサポート校のチューター



マレーシアにおける「旅」のプログラムで、現地の市場を回る「学院」の生徒

「蔵本さんのプロフィール」

大分県出身

1990 3月、福岡女学院大学人間関係学部を卒業。在学中に教員免許状（中学校の社会科と高等学校の公民科）を取得

before 2013 4月、学校法人に入職。保育士を養成する専門学校でクラス担任などを務める

JICA Volunteer 2017 3月、青年海外協力隊員としてザンビアに赴任

after 2019 7月、インフィニティ国際学院にチューターとして就職

インフィニティ国際学院

開校：2019年

事業内容：通信制高校のサポート校として単位取得のための勉強を支えるかたわら、国内外各地で集合型研修などの学びの場を提供する

ウェブサイト：



※2021年12月～22年3月入社のチューターを募集中です（問い合わせはウェブサイトから）。

「プラス」を引き出す教育を目指していると知り、応募を即決した。

教員として専門学校に勤務するなか、学生の成績を上げることばかりに注力する指導で成果は出せたものの、そうしたやり方の正しさに確信が持てず、視野を広げるために協力隊に参加。

「マイナス」をとがめ合うのではなく、「プラス」を認め合う。そうした社会を目指すことの意義を協力隊経験を通じて確信するに至った蔵本さんは、帰国後、既存の学校教育に収まらない教育を求める子どもたちを受け入れる教育機関に就職した。

行き詰まりを打開するために

高校は進学校だったが、成績は落ちこぼれだった。勉強以外で活躍できる場を見つけないければと、生徒会活動などにも手を挙げたが、「勉強が先」と教員に拒まれた。「あいつはクズだ。そう陰口を叩く同級生もいた。大学生になり、自分を蔑む人たちを見返すために「箔」を付ける手段にしようと考えたのが「海外」だった。外国語は苦手だったが、構わずバックパッカーとしてアジアの国々を旅した。

大学卒業後は保育士を養成する専門学校に就職。クラス担任や情報処理授業の講師などとして社会人の第一歩を踏み出した。保育士の経験がない蔵本さんが担任するクラスの学生たちが、あからさまに「貧乏くじを引いた」という態度をとるなか、蔵本さんは保育士の経験がなくてもできる「成績を上げるた

めに尻を叩く指導」に徹することにした。勉強が嫌いで怠けがちな学生は、容赦なく叱る。実習では上手に園児を扱うことができるけれども、座学の態度が悪い学生を叱った際、「私の可能性を潰さないで！」と反発されたこともあった。学生の「プラス」には目を向けず、「マイナス」の克服ばかりを求める指導は、自分が高校時代に受けて嫌だと感じたものだったが、「マイナス」に目をつぶることの正しさに確信が持てなかった。学生たちに陰で付けられたあだ名は「鬼の蔵本」。結局、担任したクラスは就職率が高く、学校側に評価されたが、「勉強が苦手な学生の可能性をつぶしている」という葛藤は消えなかった。

そうして行き詰まりを感じるなか、打開策として思い出したのが「海外」だ。今とはまったく違う環境で暮らせば、仕事や生き方について新たな視点を得ることができのではないかと。そうして協力隊に応募。ザンビアに派遣されることとなった。

協力隊員として配属されたのは小・中学校。主な活動は、小学校のクラス担任たちにPC指導の要領を教えることだ。小学校では理科授業にPC指導が組み込まれていたが、クラス担任たちにはPCの知識が乏しかった。

「プラス」を伸ばす教育を

蔵本有紀さん

ザンビア・PCインストラクター・2016年度4次隊



配属先の教員にPCの指導をする蔵本さん

「旅」で視野を広げる教育機関

派遣前の職場では、女性社員が結婚すると職場から「出産は迷惑がからない時期に」というプレッシャーがかけられたが、協力隊時代の配属先ではそうしたことはなく、育児休業をとる職員の穴をほかの職員が嫌な顔をせず埋めていた。それを見た蔵本さんは、「マイナス」を補い合う社会の良さを実感した。

一方、ザンビアに派遣されていた協力隊員たちのバックグラウンドはさまざまであり、共同で日本文化紹介のイベントを行うときは、「踊り」「器楽演奏」「写真撮影」などそれぞれが特技を生かせる役割を担い、盛大なイベントが実現した。そうした経験を通じて蔵本さんは、「プラス」を生かし合う社会を目指す意義について確信を得ることができた。この確信を踏まえて帰国後の進路に選んだのが、現在勤務するインフィニティ国際学院（以下、「学院」）。通信制高校のサポート校で

ある。「学院」が目指すのは、「勉強が苦手」などの理由で既存の学校教育に収まらなかった子どもたちの「プラス」を引き出し、彼らのなかから社会のリーダーを輩出することだ。生徒に寄り添いながら学びを支える「チューター」という立場での就職だった。「学院」が「プラス」を引き出す方法としているのは「旅」である。国内外の各地を4週間ごとに移動しながら、その地の高齢者施設、農家、企業などさまざまな場で社会課題に関する探求を進めていく。「旅」と並行して、通信制高校「八洲学園大学国際高等学校」の卒業を目指した勉強を続け、大学進学という進路の可能性もつくる。チューターの主な役割は、「旅」のプログラムの企画や準備、引率、および通信制高校の勉強のサポートだ。

チューターとして生徒に接するなか、蔵本さんはたとえ通信制高校の勉強が滞っているような生徒であっても、ためらいなく「プラス」をほめる。例えば、生徒が「旅」のプログラムを通じて「ITは世の中のさまざまな場面を便利にすることができるらしい」と起業の方向性を見出し始めたなら、その気づきをほめる。簡単なことのようにだが、「鬼の蔵本」の時代にはできなかったことだった。

蔵本さんは現在、協力隊仲間を含め、自分が持つネットワークにいるさまざまなタイプの人物を「旅」のプログラムに取り込み、生徒たちの視野の広がりにつなげることに力を入れていく。チューター自身がそのようにして自分の「プラス」を生かして仕事をするこ

\*サポート校…通信制高校の生徒や高等学校卒業程度認定試験の合格を目指す人の学習を支援する教育機関。



# よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、O・B・O・Gに語り合ってもらいます。



〔座談会参加者〕

Cさん(男性)

【派遣前】  
総合病院の理学療法士  
【協力隊】  
▶退職参加  
▶理学療法士  
・大洋州  
・2017年度派遣  
▶リハビリ専門病院に配属され、治療の支援などに従事  
【現在】  
大学病院の理学療法士

Bさん(男性)

【派遣前】  
総合病院の理学療法士  
作業療法士  
【協力隊】  
▶退職参加  
▶理学療法士  
・アフリカ  
・2016年度派遣  
▶総合病院に配属され、治療の支援などに従事  
【現在】  
医療機関の経営コンサルティングなどを行う企業の社員

Aさん(女性)

【派遣前】  
訪問看護ステーションの作業療法士  
【協力隊】  
▶退職参加  
▶作業療法士  
・中南米  
・2016年度派遣  
▶特別支援学校に配属され、自助具の作成方法の指導などに従事  
【現在】  
訪問看護ステーションの作業療法士

**A** 作業療法士として訪問看護ステーションに勤務した後、フィリピンへの語学留学などを経て協力隊に参加しました。配属先は特別支援学校で、自助具を手づくりし、その方法を同僚に伝える活動などに取り組みました。現在は再び作業療法士として訪問看護ステーションで働いています。本業のかたわら、派遣国の障害者の自立支援を目的にコーヒー豆を輸入・販売する会社を同期隊員と共に立ち上げ、その運営にも携わっています。

**B** 整形外科クリニックと総合病院で理学療法士として働いた後、退職して協力隊に参加しました。配属先は総合病院のリハビリ科で、治療の支援や実習生の指導などに携わりました。帰国後は、医療機関の経営コンサルタントなどを行う会社に就職しました。現在は、勤務先が経営を引き継いだクリニックの事務長として、人や予算の管理などに携わっています。

**C** 派遣前は理学療法士として総合病院に勤務していました。協力隊は退職しての参加です。リハビリ専門病院に配属されて、院内での治療や患者さん宅への訪問治療の支援などに取り組みました。現在は大学病院で理学療法士として働いています。

帰国後の進路選択

**C** Bさんの帰国後の進路はかなり大きな転身ですが、どのような考えから今の仕事を選ばれたのでしょうか。

**B** 協力隊という貴重な経験をしたからには、派遣前より何かステップアップした仕事がしたいと思いい、帰国の半年ほど前からどのような方向が良いかを考えるようになりました。そのなかで辿り着いたのが「医療機関の経営」というキーワードでした。それまでは現場

です。私の場合はどちらかと言うと、協力隊活動に全力で取り組んだがゆえの「燃え尽き症候群」でした。帰国直後は介護など作業療法士以外の仕事も経験してみたのですが、やがて自分は作業療法士の仕事が好きなのだと思いつくようになりました。それでも、協力隊を経験したからには、派遣前と同じような仕事を繰り返したくはない。そう思うなかで見つけたのが、現在の勤務先でした。介護保険が適用されない自費のリハビリサービスも提供している訪問看護ステーションであり、自費であれば「旅行の付き添い」など、より患者さんの状態に適したサービスを提供することが可能です。派遣前に勤務していた訪問看護ステーションは、介護保険が適用されるサービスだけを提供するところでした。

協力隊経験が生きる場面

**A** 私は現在、派遣前と同じく訪問看護ステーションに勤務しているわけですが、現在の職場で思いがけず協力隊経験で得たものが生きていると感じることがあります。「自助具は手づくりしてしまおう」という発想です。日本では、自助具は専門の業者にオーダーメイドでつくってもらうのが一般的ですが、協力隊時代の任地ではそうした業者はいないため、身近で手に入る材料で手づくりするほかありませんでした。それをさんさん経験したこと、「不完全であっても、必要ならば手づくりで構わない」という思い切りがつきました。そうして、現在の勤務先で、例えば片麻痺で独居の患者さんのために、爪切りを片手だけで扱える器具を木片を使ってつくりました。業者に製作を依頼することもできますが、かかる費用はその患者さんには高額すぎたからです。

のスタッフとしてより良い医療サービスの提供をしようと働いてきましたが、医療サービスの質を根本で左右するのは、現場の人や予算などを管理する「経営」です。そこで、医療機関の経営に何かしらの形でかかわる仕事を通じて、より良い医療サービスを広範囲に実現することに貢献したいと考えるようになりました。現在の勤務先は転職エージェントに紹介された会社で、帰国して1カ月も経たないうちに入社しました。

**C** 私も帰国後、この先ずっと理学療法士を続けていくべきかどうかで悩みました。医療の領域でITやAの活用が進むなか、患者さんの治療に直接携わること以外に理学療法士の専門性を生かせる仕事が増えていくのではないかと考えたからです。そうして、広く情報を集めるために休日是一日中図書館にこもるという生活をしばらく続けたのですが、そのなかで気づいたのは、やはり自分は「海外」への興味が高いということでした。どうしても海外に関係する本ばかりを読んでもしょう。そこで、私が住んでいる県で暮らす外国人のことを調べてみると、これからの人数が増えていく見込みだということがわかりました。県内で外国人の患者さんを受け入れる機能を真っ先に整えなければならぬのは、当県では大学病院です。私が大学病院への就職を決めたのは、外国人の患者さんへの対応に自分の協力隊経験を生かすことができるかもしれないと考えたからです。その後、県の国際交流協会の「医療通訳サポーター」に登録し、外国人の患者さんを受け入れる際の調整に必要な知識を認定する「外国人患者受け入れ医療コーディネーター」の資格も取得しました。

**A** 帰国後にリハビリの仕事が続けるべきかどうかで悩んだという点は、私も同じくしたい」という強い思いで仕事に取り組むことで成果を出すこともでき、勤務先にもそれを評価されています。

今後のビジョン

**B** 私は今でも「現場」で働きたいという思いがあります。Aさんは作業療法士として「現場」で働きつつ、ほかにも派遣国のコーヒー豆の輸入・販売というやりたい仕事もされているというので、「二足のわらじ」を良い形で実現されていてうらやましいと感じたのですが、コーヒー豆の事業に専従するといった予定はないのでしょうか。

**A** コーヒー豆の事業だけで生計が立つようには目指すと、派遣国の障害者の自立支援という目的から外れたこともしなければならなくなる可能性もあるので、今のところ専従するということは考えていません。ただ、もともとコーヒーが大好きなので、ゆくゆくはどこかでカフェを開きたいというビジョンは持っています。

**C** 私は今後について、コロナ禍が収まった後はまた県内に外国人の方が戻ってくるはずなので、それに向けて勤務先で外国人患者の受け入れ体制を整えるために寄与していきたいと思っています。

**B** 先ほどCさんがお話しされたように、ITやAの活用が医療の領域でも進んでいます。私の現在の勤務先はその推進にも積極的に取り組んでいます。せっかくそうした会社で働く機会を得ることができたので、いずれは途上国の医療現場でITやAの活用を進める事業などに携わることができたらと希望しています。



「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

## 特定非営利活動法人 シニアボランティア 経験を活かす会

### 会の目的

- JICA海外協力隊の活動紹介、参加希望者の支援、経験者の社会還元活動の支援を行う
- 地方自治体や各種団体が行う国際協力活動や、小・中・高等学校や大学での国際理解教育への参加、およびその支援を行う
- 留学生・海外からの研修生・外国つながる児童や生徒の学習などを支援する



杉並区立荻窪中学校で国際理解教育の出前授業を行った当会のメンバーと、共に参加してもらった日本で暮らす外国人たち

### Outline

正式名称	特定非営利活動法人 シニアボランティア経験を活かす会
設立時期	2004年
法人格	特定非営利活動法人

### Organization

代表者	鈴木新(シニア海外ボランティア/メキシコ・品質管理・2012年度1次隊ほか)
会員数	104人
入会資格	JICA海外協力隊に参加した人、および当会の活動に関心がある人
会費	3000円/年

### Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年5月に開催
定例会の頻度	役員会は2カ月に1回開催 全会員による定例会は月に2回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メール・対面式会議・Web会議を併用

### Contact

問い合わせ窓口	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <a href="mailto:suzuki.shin@lake.ocn.ne.jp">suzuki.shin@lake.ocn.ne.jp</a></li> <li>■ <a href="mailto:info@jicasvob.com">info@jicasvob.com</a></li> <li>■ 046-873-8026</li> <li>■ 090-3001-8602</li> </ul>
情報発信の手段	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <a href="https://jicasvob.com">https://jicasvob.com</a></li> <li>■ <a href="https://www.facebook.com/jicasvob">https://www.facebook.com/jicasvob</a></li> </ul>

「シニア」の派遣区分で協力隊に参加した人を主なメンバーとする当会が設立されたのは2004年だ。翌年には法人格を取得し、組織の基盤を強化。以後、地方自治体や学校から事業の実施を受託するなどして、協力隊経験を生かした活動を活発に展開してきた。

メインの活動の1つとなってきたのは、教育委員会などからの委託により、小・中学校の「総合的な学習の時間」に国際理解教育の出前講座を行うことだ。当会のメンバーがそれぞれの派遣国の出身者とペアを組んで登壇し、その国について紹介するのを基本としている。手法のアイデアの共有や改善点の検討、実習などを行う「出前講座委員会」を毎月1回開催するなどして、提供する講

座の質を高めていった結果、当会の評価が定着。多い時期で月に20件ほどの実施依頼が入るようになった。

もう1つのメインの活動は、外国籍児童やその保護者への支援だ。新宿区や杉並区など外国籍児童が多い地方自治体の教育委員会からの委託で取り組んでいるものであり、保護者に向けた学校連絡文書の翻訳を行っている。また、横浜南区では外国につながる児童を対象とする日本語支援教室を開催している。

「こんな活動をやりたい」という思いを持つメンバーがそれを企画にまとめ、役員会の承認を得て当会の名義で実行することもできます。活動のアイデアを持つ方はぜひ、当会を利用してそれを実現していただければと思います」（鈴木代表）

主に長野県在住の協力隊経験者で構成する当会が設立されたのは1973年。県内の国際交流イベントの共催などで多文化共生の推進に寄与するほか、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の協力隊候補生と味噌づくりを通して交流するイベントなども継続してきた。

2019年10月に日本に上陸した令和元年東日本台風で千曲川の堤防が決壊し、長野市で大規模な浸水被害が発生した際には、被害が特に大きかった同市長沼地区に設置されたボランティアセンターの拠点の運営を支援。泥出しなどのボランティアをする人を県内から集めたり、そのコーディネートを担ったりした。

被災から約1年経った20年11月には、同地区でのボランティア活動に

参加した人たち（以下、「参加者」）に謝意を伝えたいという住民の思いを実現するため、「参加者」を同地区に招くイベントを当会で開催。りんご栽培が盛んな地域であるため、りんご狩りを楽しんでもらったほか、被災地の現状を見てもらったりした。集まった「参加者」とその家族は約170人にのぼった。

「当県は広く、県在住の協力隊経験者が交流する機会を設けるのは容易ではありません。一方、当県は『移住したい都道府県』では常に上位であり、ターナーやUターナーで当県を帰国後の生活の場とする協力隊経験者も多い。より多くの方々に活動に参加してもらえよう、今後はオンラインの活用も進めていきたいと考えています」（小林代表）



令和元年東日本台風の際の被災地支援ボランティアを招いて行った、長野市長沼地区でのイベントに集まった人たち

## 青年海外協力隊 長野県OB会

### 会の目的

- 海外で培った貴重な経験を地域社会に還元する
- 会員相互の親睦を図る

### Outline

正式名称	青年海外協力隊長野県OB会
設立時期	1973年
法人格	任意団体

### Organization

代表者	小林恭介(エクアドル・野菜・1996年度1次隊)
会員数	約250人
入会資格	長野県在住のJICA海外協力隊経験者。ただし、県外在住者も会費を納入すれば入会可。
会費	2000円/年(夫婦は1人分とする)

### Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年6～8月に開催
役員会の頻度	四半期に1回程度
会員・役員間の主な連絡手段	2020年度からWeb会議

### Contact

問い合わせ窓口	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <a href="mailto:info@nagano-jocv.com">info@nagano-jocv.com</a></li> <li>■ <a href="https://m.facebook.com/naganojocv/">https://m.facebook.com/naganojocv/</a></li> <li>■ <a href="http://nagano-jocv.com/">http://nagano-jocv.com/</a></li> </ul>
情報発信の手段	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <a href="https://m.facebook.com/naganojocv/">https://m.facebook.com/naganojocv/</a></li> <li>■ <a href="http://nagano-jocv.com/">http://nagano-jocv.com/</a></li> </ul>



# 先輩隊員の シューカツ記

## 就職先：

### 白井グループ株式会社

事業概要：AIを活用した配車システムによる廃棄物処理、家電リサイクルの指定引取場所の運営、資源循環のDX(\*)の促進、海外における廃棄物処理への協力

\*DX…[Digital Transformation]の略。デジタル技術の活用による企業変革。

## 略歴

- 2017年1月、青年海外協力隊員としてモザンビークに赴任
- 2017年3月、東洋大学国際地域学部卒業
- 2017年4月、同大学院国際地域学研究所修士課程入学（「JICAボランティア入試」の制度を利用）
- 2019年1月、帰国
- 2020年3月、同修士課程修了
- 2020年4月、白井グループ株式会社に入社

## 協力隊時代の活動を教えてください



小学校で環境教育の授業を行う佐野さん

マプト州マプト市の市役所廃棄物管理・衛生局に配属され、小・中学校での環境クラブの設置とその運営の支援、公共エリアでの住民への環境啓発の支援、環境啓発を目的とする街でのゴミ拾い活動などに取り組みました。

## 今月の先輩隊員：佐野卓也さん

出身地：東京都

職種：環境教育

生まれた年：1994年

派遣国：モザンビーク

任期終了時年齢：24歳

隊次：2016年度3次隊



現在の所属先：業務部民間作業課

廃棄物処理に関する業務、DXによる作業効率化などを担当しています。

「白井グループ株式会社」ウェブサイト

▶ <https://www.shirai-g.co.jp>

## 協力隊経験を応募書類にどう表現しましたか？

日本での社会人経験がなかったため、協力隊経験は私の重要なアピールポイントだったのですが、協力隊に馴染みがない方にも制度について理解していただけるような表現を意識しました。

## 協力隊経験を採用面接でどう表現しましたか？

企画力や実行力、問題を発見・分析する力、人を巻き込む力など、協力隊経験を通じて得た力を挙げ、自分が成長できた経験だったことがわかってもらえるようにしました。

## 就活で「このやり方は良かった」と思うことは？

応募する企業ごとに事業内容を紙に書き出して整理し、私の知識や経験がどの事業でどのように生かせるかを分析したことは有益だったと感じています。

## 現在の仕事のやりがいを教えてください

現在、私が携わっている日本の廃棄物処理業に関する課題を発見し、その解決の糸口を見つけたり、実際の解決にかかわったりできたときにやりがいを感じます。

## 今後の抱負をお願いします

入社してまだ1年なので、社の戦力となれるよう、まずは今与えられている業務に励みたいと思っています。そのうえで、廃棄物処理業界のDXの促進など、廃棄物処理業を通じてできる環境問題の解決に向け、協力隊や大学院で得た廃棄物に関する知識や経験を生かしていきたいと考えています。

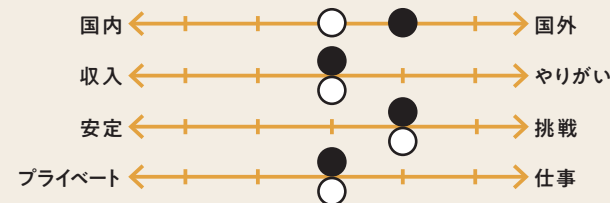
\* ネイチャーゲーム…自然体験プログラム的一种。

## 自己分析

強み	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 企画力</li> <li>■ 実行力</li> <li>■ 問題を発見・分析する力</li> <li>■ 人を巻き込む力</li> <li>■ 環境への適応力</li> <li>■ 海外在住経験があること</li> </ul>
弱み	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 社会人経験の不足</li> <li>■ 遅延なく計画を遂行する力の不足</li> </ul>
資格	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ネイチャーゲームリーダー</li> </ul>

## 仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前=● 協力隊参加後=○



## 就活の方針は？

協力隊活動も大学院での研究テーマも「廃棄物」に関するものであったことから、これに関連する企業に的を絞って求人情報を探しました。

## MESSAGE

内定をいただけるかどうかの成否を分けたのは、応募先の事業の研究をどれくらいしっかり行ったかだったと思います。自分が応募先にどのように貢献できるかが具体的に見えてくるまで、しっかり研究をして臨んでください。

応募…5社  
書類審査通過…5社  
内定…2社

## 内定

## GOOD WAY!

応募先の事業の分析と自分自身の強みの分析を踏まえ、応募先に対して自分がどのように貢献できそうかをできるだけ具体的に話すことが重要だと思います。

## 面接

現在の勤務先の面接では「志望動機」や「自分の強み」のほか、「自分を動物に例えると何だと思うか」などユニークな質問もされました。応募先の事業についての事前の整理・分析が足りず、「自分はここで何ができるのか、何がしたいのか」を明確に言葉で表現することができなかったために内定に至らなかったこともあり、やはり応募先についての研究は重要だと思いました。

## GOOD WAY!

現在の勤務先はインターンをしたことから、書類より面接が重視される特別選考を受けることができました。そうした採用方法をする企業も増えているようです。

## 書類審査

応募先は5社で、それぞれ提出が必要な書類の種類は異なりましたが、おおむね共通していたのは履歴書・職務経歴書・志望理由書です。社会人経験はありませんでしたが、それまで学校や協力隊などでどのような困難に直面し、それをどのように乗り越えてきたか、そうした経験によって自分がどのような力を得ることができたかを洗い出し、書類に盛り込むようにしました。

## 情報収集

企業の方と協力隊経験者が参加するJICA主催の帰国報告会・交流会、JICAの国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」、就職エージェント、企業のウェブサイトなどを利用しました。情報収集にあたっては、各企業の現在の事業だけでなく、今後取り組む予定の事業についても確認し、先々どのような仕事に携わることができそうなのかも探るようにしました。

## GOOD WAY!

JICA主催の帰国報告会・交流会では、参加している企業の方から「どのような理由で協力隊経験者を欲しているか」を伺うことができたため、協力隊経験の生かし方についてイメージを得ることができました。

## 就職!

帰国の1年3カ月後

帰国の4カ月後

帰国の2カ月後から

帰国の1カ月後から

## シューカツ START



JICA 海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」  
▶ [https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career\\_support/counselor/](https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/)

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。  
※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。





①出張先に持参するトレーニングの器具 ②出張先でトレーニングを行う中島さん。利用者の目的は、「ダイエット」「ボディメイク」「筋力アップ」などさまざま

出張型ジム  
「CUELPO」  
代表

なかじまひろのり  
中島宏典さん

- パラグアイ
- 陸上競技
- 2015年度4次隊

## マンツーマンで健康を支える出張型事業を実践

陸上競技隊員として選手の指導に取り組むかたわら、「肥満が多い」という任地の健康課題の解決に向け、出張型のトレーニング指導も行った中島さん。その経験をもとに帰国後、出張型のトレーニング指導を行う事業を立ち上げた。

### PROFILE●なかじま・ひろのり

1992年生まれ、群馬県出身。小学生のときに陸上競技を始め、110メートルハードルで高校時代と大学時代にそれぞれ群馬県大会と北信越大会で優勝。2015年に新潟大学教育学部健康スポーツ科学課程を卒業。16年3月、青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任し、地方都市の陸上競技協会が運営する陸上競技教室での指導などに取り組む。18年3月に帰国。18年6月、出張型でパーソナルトレーニングを行う事業「CUELPO」(QRコード)を立ち上げる。



# JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

## ダ

「イエットや体力維持のために屋外でジョギングしたり、スポーツジムに通ったりするのは誰にでも実践できるわけではない。体型に自信がなければ人前で運動するのは恥ずかしさや先立ってしまう。そもそも運動を楽しいと感じることができない人ばかりではない。ジョギングやスポーツジム通いが難しいという人でも、自宅でマンツーマンの指導を受けながらであれば運動を継続することができるはず」。協力隊経験者の中島宏典さんが帰国後に地元・群馬県で立ち上げたのは、利用者のもとを訪問してマンツーマンでトレーニング指導をする事業「CUELPO」だ。2018年6月のスタート以来、見込みどおりに利用者が増え、入会待ちをしてもらわなければならない状態が続いている。

使うトレーニング器具は、ダンベルやバランスボールなど、車に積んで利用者のもとに運べるだけのもの。「ダイエツト」「ボディメイク」「筋力アップ」など利用者の目的に応じて、持参する器具でできる範囲のトレーニング指導を行う。中島さんが基本方針としているのは、利用者の様子を見ながら、それぞれに合ったプランを組むことだ。

「トレーニングを継続してもらうためには、『楽しい』と感じてもらうことが必要です。陸上競技選手としての自身の経験で実感しているのは、できなかったことができるようになることがスポーツのとても大きな楽しみであるということ。使う道具を目的とするトレーニング指導を行うことだ。任地では「肥満」が健康課題となっていたため、トレーナーとしての専門性を生かしてその解決に寄与しようとして取り組んだ活動である。最初は病院の空き部屋を借りて「教室型」で実施。やがて、肥満を解消したいものの、体を動かす姿を人に見せるのを嫌がって教室に通わない人がいることがわかってきた。そこで中島さんは「出張型」を導入。すると、そのニーズは予想以上に高かった。そうして帰国後の進路として構想するようになったのが、利用者のもとに出張してマンツーマンでトレーニング指導をする事業だった。

「協力隊に参加する前は、『運動が必要だ』と思ったらスポーツジムに行けば良い」という考えでした。しかし、協力隊時代のダイエツト指導でまったく違う発想ができるようになりました。任地では、出張型で指導する際に持参できる器具はほとんどありませんでしたが、対象者の家にある椅子や重い物を使えばトレーニングができ、実際に体重減の結果も出ました。それならば、日本でもランニングマシンなどスポーツジムが備えている機材を使わなくても、有効なトレーニング指導ができるはずだと確信を得ることができました」

## 人を見る目

CUELPOの事業はその発想自体が協力隊経験で生まれたものだが、トレ

「そのため私は、『少しがんばればできるようになる』というハードルを設定し、『できるようになった』という体験を重ねてもらうことが、トレーニングを楽しむための重要なポイントだと考えています。運動の能力は人それぞれであり、『少しがんばればできるようになる』というラインは異なります。マンツーマンの指導ならば、それらを見極めることができず、CUELPOでそれぞれのお客様に対して組むトレーニングプランは、言わばその人に合ったハードルを、その人に合った間隔で並べたものです」

## 事業の骨格は協力隊で獲得

中島さんは小学生のときに陸上競技を始め、現在も社会人選手として競技を続けている。得意種目は110メートルハードルで、大学時代には北信越大会で優勝するほどの実力だ。スポーツに関する探究心は強く、大学ではスポーツ科学を専攻。在学中に、アスリートのトレーナーに必要な技術を認定する米国の資格も取得している。大学を卒業する時点で漠然と描いていた進路は、スポーツトレーナーとしてジムを立ち上げること。それを成功させるためには、海外でスポーツ指導に携わり、自分にはない強みを得ておくのが有益だろうと考え、卒業後の第一歩として協力隊を選んだ。

メインの活動は、地方都市の陸上競技教室での選手たちへの指導。それと並行して取り組んだのは、住民を対象にダイナーとしての実務についても、協力隊経験で得たものが生きていると中島さんは感じている。その1つは「対象者を観察する目」だ。協力隊時代に出張型でトレーニング指導をする際、「楽しんでもらえなければ挫折してしまう」との危機感から、不慣れなスペイン語での意思疎通に頼らずに、相手の表情から楽しんでいくかどうかを探った。すると次第に、「この人はバランスボールに乗るのが好きらしい」といったことを言葉で説明されずとも察知できるようになっていった。CUELPOでトレーニング指導をする際、前述のように「少しがんばればできるようになる」というハードルを見極めることができるのは、協力隊時代に体得した観察眼があるからこそだと中島さんは感じている。

入会待ちが出始めた時期、中島さんは従業員を雇って事業規模を拡大すべきか悩んだ。しかし現在までのところ、その選択はしていない。利用者の特徴を察知することは、協力隊員のように異文化社会で現地の人たちと密に付き合う経験をした人でないといえるから。 「ダイエツトは必ずしもすぐに目に見える結果が出るわけではないため、それに寄り添ってトレーナーとの信頼関係が成功を左右すると言われています。人との信頼関係のつくり方を人に指導できる自信はまだありません。そのため、まずは私自身が『信頼されるトレーナー』となるための力を磨くことに専念したいと考えています」



# つぶやき

お題 ▶ 誕生日



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

## 誕生日ルール

派遣国の誕生日ルールは「本人がパーティーを開く」というもの。私はホームステイ先で自分の誕生日パーティーを開き、現地の定番のごちそうやお好み焼き、ケーキなどをホストファミリーや友人に振る舞った。最初は気恥ずかしさもあったが、皆が楽しんでくれる姿は最高にうれしく、帰国後もこのスタイルを継続。すると、「今年はどんな風にもてなそうかなあ」と誕生日を待ち遠しく感じるようになった。

ペンネーム：しゃん太郎さん（中南米・家畜飼育・2016年度派遣）

## ★ 何曜日？

月曜日生まれの女性は「花子」、火曜日生まれの男性は「太郎」など、私の派遣国では生まれた曜日と性別によってファーストネームが決まる地域があり、同じファーストネームの人がたくさんいた。そのため、たいていの人が「自分は何曜日に生まれたか」を把握していたが、その一方で、生年月日を尋ねても答えることができない人が割と多いのは不思議だった。

ペンネーム：ブラサカ隊員さん  
（アフリカ・障害児・者支援・2018年度派遣）

## ★ ケーキの取り皿

英語教師として活動した私は、生徒との信頼関係を築くため、授業以外の場でもできるだけ多く生徒と交流するよう努めた。その1つが、授業の後に開いた生徒の誕生日パーティー。ケーキを取り分ける皿がなかったので、ケーキが入っていた箱を皆でちぎって皿をつくった。生徒間、あるいは生徒と私の間に信頼関係が築かれたのは、そうしたさやかな交流の積み重ねによってだった。

ペンネーム：こぶちあいさん  
（アジア・青少年活動・2018年度派遣）

## ★★★ 18歳の誕生日

配属先の児童養護施設にいたある少年の18歳の誕生日。配属先は誕生日パーティーを開くことはできたが、彼が大学に進学するための費用は払えなかった。施設の子にとって18歳の誕生日は、公的支援が切れる日。彼らは支援を受け続けたいわけではない。施設を出た子が、18歳の誕生日を迎える後輩たちに「おもしろい人生が待っているよ」と語れる日が来ればと願っている。

ペンネーム：さくりー!!さん  
（中南米・青少年活動・2017年度派遣）

募集中のお題

「身だしなみ」「寄り道」

投稿は『クロスロード』編集室まで  
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが  
イラストになるかも!?



## 「青年海外協力隊の日を祝う会」を実施

JICAボランティア事業が発足した4月20日は「青年海外協力隊の日」とされており、毎年この日には(公社)青年海外協力協会(JOCA)が「青年海外協力隊の日を祝う会」を開催してきました。今年は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、JOCAが帰国隊員を代表して東京・渋谷区にある物故隊員の慰霊碑「友よやすらかに」に献花し、黙祷を捧げました。

## AMラジオ局「CRT栃木放送」で協力隊員が出演する新番組がスタート

栃木県内対象のAMラジオ局「CRT栃木放送」で2021年3月31日より、同県出身のJICA海外協力隊経験者が派遣中の活動や思い出について話す新番組「地球はひとつ」がスタートしました。放送時間は毎週水曜日の午前10時40分から15分程度で、放送期間は1年間の予定です。番組の詳細については、CRT栃木放送のウェブサイトでご確認ください。放送から1週間以内であれば、ラジオ番組をパソコンやスマートフォンで聴くことができるサービス「ラジコ」で視聴可能です。



第1回に出演した熊倉百合子さん(インドネシア・青少年活動・2008年度1次隊=手前)とパーソナリティーの小暮智さん



CRT栃木放送のウェブサイト



ラジコのウェブサイト

## 「協力隊まつり 2021 ~いろいろな未来が見えてくる~」を開催

JICA海外協力隊のOB・OG会など協力隊に関連がある団体が集結し、協力隊員の活動や生活、帰国後の活動などを紹介する催し「協力隊まつり 2021 ~いろいろな未来が見えてくる~」(主催・協力隊まつり実行委員会、共催・JICA)が2021年4月24日、25日にオンラインで開催されました。「青年海外協力隊の日」とされる4月20日を迎えるこの時期に毎年、JICA国内機関の施設を会場に開催されてきましたが、昨年は新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止され、今年は初めてオンラインでの開催となりました。

今回の参加は約40団体。それぞれが自由に入退室できるZoomミーティングを設置し、団体の紹介、協力隊活動や帰国後の活動の報告会、国際協力に関連するテーマのトークイベントやセミナー、写真展などさまざまなプログラムを行いました。JICA青年海外協力隊事務局も参加し、協力隊の説明会や応募相談座談会を開催しました。



「協力隊まつり 2021」の広報用チラシ

## クロスロード

令和3年6月号【第57巻第5号 通巻667号】  
発行日 令和3年6月1日

編集・発行：  
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局  
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1  
竹橋合同ビル

『クロスロード』はJICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。



## ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今月号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか? ご意見・ご感想をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画のアイデアや、ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひお知らせください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活の“失敗談”をお寄せください。
- 派遣国での活動・生活に役立つ“ちょっとした技”をお持ちでしたら、ご紹介ください。
- P34に記載している「お題」で、派遣国での活動・生活のひとコマをつぶやいてみませんか。
- 日本でもつくりことができる派遣国の料理のレシピをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室  
crossroads@sojocv.or.jp





# 隊員めし

おかわり!

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

モンゴルは遊牧生活を中心としてきた地域であるため、独自の食文化は肉と乳製品の料理が大半ですが、ニースレル・サラットはお隣のロシアから伝わった料理です。祝いの席、町の食堂、家庭の食卓などあらゆる食事の場で、サラダと言えば山盛りのニースレル・サラットが出てきます。おいしさのポイントは、ていねいに大きさを揃えて角切りすること。現地では、大きさがまばらだと指摘が入ります。私もよく熱心にご指導いただき、この料理に対する現地の方々の深い愛情を感じました。



モンゴルのピクニックの食事風景

## 今月の料理人



かわはらあやか  
河原礼佳さん

(モンゴル・料理・2017年度3次隊)

●活動内容：ドンドゴビ県職業訓練校に配属され、料理コースの実習授業での指導や、住民対象の料理教室の開催などに従事。



## モンゴル風ポテトサラダ「ニースレル・サラット」

### 材料(3人分)

じゃがいも…大4個  
にんじん…1/2本  
玉ねぎ…大1/8個  
グリーンピースの水煮(缶詰)…50g  
きゅうりのピクルス(瓶詰)…100g  
厚切りハム…100g  
マヨネーズ…100~150g(お好みで調整)  
塩・こしょう…適量

### 作り方

- 1 じゃがいもとにんじんの皮をむき、小さく角切りにする。
- 2 鍋に①を入れ、かぶるくらいの水と塩少々を加えて柔らかくなるまでゆでる。
- 3 ざるに②を上げ、粗熱を取る。
- 4 グリーンピースは缶から出し、水気を切る。玉ねぎはみじん切りに、ピクルスとハムは小さく角切りにする。
- 5 ポウルに③と④を入れ、マヨネーズを加えて混ぜ合わせる。

⑥ 塩とこしょうで味を整え、お皿に盛り付ければ出来上がり。



カットした食材。角切りはいずれも1センチ角ほどに

### ひとくちメモ

すべての食材が日本でも容易に揃うため、現地のレシピをそのままご紹介しました。現地では、入れる食材はだいたいどこでも同じでした。味付けはマヨネーズによるシンプルなものですが、小さく角切りにした食材のクセになる食感が特徴です。そのままスプーンでモリモリ食べてもよし、食パンにたっぷり挟んで食べてもよし。厚切りハムの代わりにソーセージを使っても大丈夫です。



## 今月号の表紙 トンガ



おきつえみ  
文=興津絵美さん  
(珠算・2016年度1次隊)

トンガでは小学3~5年生の算数授業に珠算指導が組み込まれており、私は約20の小学校を巡回してその支援に取り組みました。写真は、巡回先の5年生のクラスで現地の先生が珠算指導を行っている様子です。右の女子児童は全国大会で上位に入るほどの実力。現地の先生たちが小学生だったころは、今ほど珠算指導が充実していなかったため、この女子児童に太刀打ちできるような先生はいませんでした。  
※興津さんの活動の詳細は6~7ページで紹介しています。